

研 究 紀 要

第 26 号

目 次

巻頭言「野にあって国家に尽くす」	1
所長	山 本 馨

《研究報告》

1 パワフルAOMORI！創造塾	4
～これまでの地域の人財育成事業の沿革と成果について～	
育成研修課	社会教育主事 北 澤 茂
2 職場体験等に係る学校と企業等の連携	30
～青森市における職場体験・インターンシップに係るアンケート調査からの一考察～	
教育活動支援課 課長	大 瀬 雅 生
	社会教育主事 小 森 直 樹

巻 頭 言

「野にあつて国家に尽くす」

青年期の読書体験は鮮烈である。友人の勧めで司馬遼太郎著「龍馬がゆく」(文春文庫)に出会った。夢中で読んだ。心が弾んだ。龍馬には圧倒的な存在感があった。そこに描かれた青春群像と歴史観は自分の基底部分を形成することになる。龍馬ファンの勢いは止まらない。青森では国派遣のキャリア官僚が職員講話で龍馬の生き様を絶賛するし、福岡では龍馬に感化された武田鉄矢が海援隊を名乗り歌いまくる。国全体がこの小説に浮かれていた感がある。

三十代前半に斗南藩ゆかりの廣澤安任ら先人を顕彰する施設の整備構想について三沢市から相談を受け、初めて斗南藩の歴史と先人廣澤安任らの業績を少しだけ勉強する。廣澤安任は青森県の成立に尽力し、日本初の洋式民間牧場を開設して日本の近代化に貢献した逸材。郷土史に対する不明を大いに恥じる。

四十代前半に石光真人著「ある明治人の記録」(中公新書)により会津人柴五郎の生涯を知る。柴五郎は日清戦争後の義和団事件(1900年・明治33年)で活躍するなどして陸軍大将にまで昇進する人物。斗南藩移封後の壮絶な幼年期の体験と薩長藩閥体制下で会津人が生き抜くこと、栄達することの困難さが詳細に語られている。

そして、五十代前半の平成23年3月11日、東日本大震災が発生する。これに伴う福島第一原子力発電所の事故により福島は幕末の会津戦争に続く悲劇に見舞われる。と人は言うものの、幕末の会津について確かな理解が伴わない。そこで、本棚に埋もれていた早乙女貢著「会津士魂」(集英社文庫)の再読に挑戦する。全13巻の大著、歴史的文書を原文のまま引用した箇所が多く、第1巻の途中で投げ出した経緯がある。さてその内容はと言えば、会津人の血を引く早乙女貢の強烈なこだわりは別にして、歴史的事実を詳細に検証した上に構築された見事な大河小説である。敗者が語る歴史がそこにある。最後に会津は戦場となり、同胞は倒れる。会津人には明治以降の過酷な運命が待ち受けている。この一読により「龍馬がゆく」で培われ司馬遼太郎的な歴史観は一部崩壊し、老年期入口とでも言う段階において、遂に歴史観の再構築を迫られるに至るのである。

こうした中で、私は、平成26年4月、青森県総合社会教育センターへ転任となった。

センターでは、本県の特色ある文化などを題材に郷土学習用のビデオ教材を自主制作している。そのライブラリーに「青森県の先人 廣澤安任～青森県をつくった自主の民～」という逸品があり、平成23年度全国自作視聴覚教材コンクール社会教育部門優秀賞を受賞したことを知る。表彰状とメダルが所長室に誇らしげに飾られている。

かくして、一個人のささやか読書体験の変遷は、絶妙のタイミングで現在の仕事とマッチングしているのである。不思議と言えれば不思議。こじつけと言えればこじつけだが。

さて、廣澤安任は大久保利通から明治政府へ招聘された際、「野にあつて国家に尽くす」と述べ、これを固辞した。我々が教材では、「困難な状況の中で最善の道を探し、自らよく生きようと努力する大切さを伝える」ものと評価する。的確な評価である。

平成27年3月

青森県総合社会教育センター

所長 山 本 馨

研 究 報 告

パワフル AOMORI! 創造塾

～これまでの地域の人財育成事業の沿革と成果について～

育成研修課 社会教育主事 北澤 茂

要 旨

「パワフル AOMORI! 創造塾」は、地域づくり・まちづくりにおける活動者の高齢化や後継者不足、形成されたネットワークの活用、地域コミュニティ再生を図る活動の活性化等の課題を解決することを目的として平成 24 年度に開始した事業である。本事業は、新たな活動者の発掘と育成、仲間づくりの促進やネットワーク（つながり）の形成・強化、活動の活性化に重点を置き、対象地域を絞り 2 年間をかけての研修を通して、地域づくりに取り組む活動者の育成を目指している。この「パワフル AOMORI! 創造塾」は、平成元年のセンター開所時より取り組んできた地域づくりを担う人財の育成を図る事業の流れを汲むものであり、途中何度か事業名を変更しながら、現在まで脈々と続く、まさに青森県総合社会教育センターの「人づくり」の歴史そのものといった事業である。

本報告は、ここに至るまでの事業の沿革と「パワフル AOMORI! 創造塾」における成果について整理するとともに、今後の展望について考察したものである。

キーワード：人財育成，地域活動，地域活性化，まちづくり，コミュニティ再生

目 次

I	はじめに	5
II	人財育成事業の沿革	5
	1 クリエイトあおもりセミナー	
	2 あしたのネットワークセミナー	
	3 パワフル AOMORI! 創造セミナー	
	4 まとめ	
III	現行事業の概要	12
	1 研修体系について	
	2 塾生について	
	3 研修内容について	
IV	考察	26
	1 研修体系について	
	2 つながりと活動の発展について	
	3 公開講座について	
V	まとめ	29

I はじめに

県では、人財の育成こそが未来の青森県づくりの基盤である、との認識のもと、チャレンジ精神あふれる人財の育成をめざし、平成19年9月、「あおもりを愛する人づくり戦略」を策定（人づくり戦略チーム）し、この戦略に基づき、地域産業や地域おこしの担い手である「あおもりの今をつくる人財の育成」を推進している。また、平成21年の「青森県基本計画未来への挑戦」を踏まえ、県教育委員会では、社会教育行政の方針と重点の一つとして「地域を支える人財の育成」を掲げ、地域活動の実践者の掘り起こしや育成、地域活動の指導者やコーディネーターの養成に努めてきた。さらに、平成26年からは「青森県基本計画未来を変える挑戦」及び「青森県教育施策の方針」を踏まえ、重点の一つとして「活力ある地域コミュニティの形成に向けた人財の育成」を掲げ、地域活動の実践者の育成、地域活動の指導者、コーディネーターの養成、地域活動に関わる人財のネットワーク形成の支援に努めているところである。

青森県総合社会教育センターでは、平成元年の開所当時の「クリエートあおもりセミナー」から現在の「パワフル AOMORI！創造塾」に至るまで、活力ある青森県の創造に向けて活動する人財の育成に取り組んできており、活動者増加や活動の活性化に成果を上げてきた。

「パワフル AOMORI！創造塾」は、これまでの事業の成果と課題を踏まえながら、平成24年度から実施している。これまで当センターで実施してきた人財育成事業の流れを確認しながら、本事業における成果と課題、今後の展望について考え、まとめることとした。

人は青森県にとって「財（たから）」であるという基本的な考え方からここでは、「人材」を「人財」と表すこととしている。

II 人財育成事業の沿革

1 クリエートあおもりセミナー

平成元～10年度

(1) 平成元～2年度

青森県の人と風土・文化等を通して、広い視点から県民性と県勢を理解し、新しい青森県の創造について研修するセミナーとして平成元年の当センター開所と同時に始まった。対象は、社会教育関係団体、青年会議所、商工団体、農業団体、行政機関等の若手リーダーとし、2年間にわたり、活力ある青森県の創造に向けて「青森県の未来に夢を馳せて」「90年代を創造的に生きるアングル」「国際化時代の視座」等をテーマに研修を重ねた。



「平成2年度受講生と講師の北村知事(当時)」

(2) 平成3～10年度

「本県の総合的理解」「自己の分析と開発」「発想法」等について学習するとともに、異業種間の人的ネットワークを構築する趣旨で、団体、学校、企業等において中堅的役割を担っている方を対象に「21世紀の青森県の展望」「青森県の新しい魅力づくり」「積極的な情報の受・発信」などについて学びを進めた。異業種間の人的ネットワークの構築、個人の資質を活性化させることによる21世紀の青森県のリーダー育成という色合いが強かった。

実際の参加者を見ると、県内企業（銀行、印刷業、建設業、食品会社、電力会社等）や公務員（県職員、市町村職員、教職員等）が多く、同じ企業から複数参加するケースもあり、企業側にとっては、社員研修の場として同セミナーを活用していたのではないかと思われる面がある。



(平成6年度 講座風景)

2 あしたのネットワークセミナー 平成11～18年度

「クリエートあおもりセミナー」の後継事業として、個人の資質を活性化させ、コミュニケーションやネットワークづくりの能力を培うことにより、青森県のリーダーの育成を図ることを狙いとして実施されたのが「あしたのネットワークセミナー」である。自己を分析し開発していきける能力、多角的な視点を持つことによって円滑な人間関係を形成できる能力、異業種間のネットワークの形成といった内容の研修が行われた。



(平成11年度 講座風景)

対象は青森県を担う若手及び中堅指導者とし、実際の参加者は、前出の県内企業や公務員が多かったが、所属先を持たない参加者の割合も増えた。社員研修というよりも個人の自発的学びとして申し込むケースが増加したことが伺える。講座形態は、「クリエートあおもりセミナー」と同じく、前後期2日ずつの計4日間で、講演、演習、ワークショップを行うものがほとんどであった。



(平成13年度ティーパーティーの様子)

3 パワフルAOMORI! 創造セミナー 平成19～23年度

これまでの「クリエートあおもりセミナー」「あしたのネットワークセミナー」の趣旨・内容を受け継ぎ、地域のコミュニティを回復させ、活気ある地域づくりを目指して、主体的に取り組むプレーヤーやリーダーを育成することを狙いとして誕生したのが「パワフルAOMORI! 創造セミナー」である。対象は、地域を元気にしたい人、青森県を元気にしたい人とし、内容もリーダーシップ・コーチ力を高める理論学習・演習、さらにはインターンシップ・活動実践を行うという形に変わってきた。

特筆すべきは、これまでは講義・演習という学習形態が中心だったものが、受講生による活動実践をメインに据えた点である。この活動実践から生まれ、後にNPO法人化し、受講生が独自に活動していったものが「田舎スイーツコンテスト」である。

「NPOにまで発展した活動実践」 ～田舎スイーツコンテスト～

このコンテストは、活動実践を企画するワークショップにおいて、一人の受講生が模造紙の隅に小さく書いていたものがコーディネーターの目に留まったのがきっかけで実現した催しである。

地産地消、食育、伝統の味と技、新しい食の文化、家庭や地域に対する誇りと愛情、文化の豊かさを発信し、地域の活性化に寄与することを目的とし、中学生から高齢者までの応募者が、自慢の逸品（オリジナルのスイーツ）を持ち寄

り、競い合う催しである。

1回目は、五所川原市の古民家を会場に行われ、163通もの応募があった。2回目は三沢市の小牧温泉青森屋で行われ、そこで準グランプリに選ばれた作品は、会場の同温泉において、県内外の人たちに提供され、好評を博している。

3回目は、青森市の三内丸山遺跡で開催され、インターネットを通じて情報を知った群馬県の高校生からの出品もあった。

こうして「田舎スイーツ」は3回の事業を通じて多くの人々に周知され、定着してきた。当初の計画では、第3回をもって終了となっていたが、参加者からの励ましの言葉や継続を望む声を受け、セミナー受講生がNPO法人「田舎スイーツ倶楽部」を設立し、独自に活動を始め、第5回まで開催している。

平成23年には、「田舎スイーツ」を全国に普及させるとともに、地域おこしの新たな商品開発の一翼を担うことで、地産地消、食育、伝統の味と技、新しい食の文化、家庭や地域に対する誇りと愛情、文化の豊かさを発信し、地域づくりや地域の活性化だけでなく、地元農家や企業の活性化に貢献していることが評価され、京都府亀岡市生涯学習奨励賞を受賞するなど、県外からも大きな注目を浴びている。



(審査の様子 第2回)



(第2回コンテスト 表彰式の様子)

4 まとめ

これまでの沿革を述べてきたが、人財育成事業の移り変わりによる違いを確認する。

対象者については、初期は職場研修の色合いが強く、参加者の大半が職場から派遣される形であった。その後、創造セミナーからは、地域おこしやまちづくりに関心の高い一般県民の参加が増加してきた。

内容については、初期は「システム思考から創造思考へ」「ディベート講座」「リーダーシップと人間関係」「企業を支える創造力」等、自己啓発を促すものや異業種間のネットワークの構築、コミュニケーション能力の向上等を目指すものが主としたプログラムであった。創造セミナーからは、「地域特性を生かした実践計画」「街づくりのノウハウ」「地域を元気にする総合戦略」等、地域の活性化、まちづくりに直結するプログラムが組み込まれ、地域での活動に関わる資質の向上を目指した内容となっている。

学習形態についても内容に伴い変化しており、初期は講義や演習が多く、また異業種間のネットワーク構築という観点から、交流会も設定されていた。創造セミナーからは、地域づくりに関わる人財の育成という観点から、地域での活動実践が設定され、受講生による体験を通じた学びが大きな成果を上げ、事業の目玉となっている。創造塾を含めた年度ごとの詳しい変遷については、次ページからの表「クリエートあおもりセミナーからパワフル AOMORI! 創造塾までの移り変わり1~4」を参照していただきたい。

このような移り変わりを経て、さらには既存の他関連事業を再構築し、平成24年度から実施しているのが「パワフル AOMORI! 創造塾」である。もちろん、青森県を元気にする人財の育成、人的ネットワークの構築という開所当初からのねらいは、創造塾においても重要視しており、今後も変わらない部分である。

次の章からは、現行事業「パワフル AOMORI! 創造塾」について、その研修体系や塾生がこれまでに行った活動実践等について詳しく述べる。

クリエートあおもりセミナーからパワフル AOMORI！創造塾までの移り変わり 1（平成元年～8年度）

年度	事業名	期間	対象	内容	学習プログラム	学習形態
元年度	クリエートあおもりセミナー	2日	団体、学校、企業等の若手リーダー	青森県の人と風土・文化等を通して広い視点から、県民性と県勢を理解し、新しい青森県の創造について研修する。	システム思考のすすめ モチベーションからサクセスへ プラスαの発想法 人的ネットワークの拡大	講義・討議 講義・演習 講義・討議 情報交換
2年度	クリエートあおもりセミナー	2日	元年度の受講者	元年度の継続事業であり、活力ある青森県の創造にむけて、「青森県の未来に夢を馳せて」90年代を創造的に生きるアングル「国際化時代の視座」等をテーマに研修する。	未来の青森県を語る 国際化時代の視座 モチベーションからサクセスへ～ラフ八戸運動とリーダーシップ～ 90年代を創造的に生きるアングル 地域活性化における外力応用術 フェアウェルパーティ	特別講義 討議・質疑 発表・講義 講義・質疑 講義・演習・討議 交流会
3年度	クリエートあおもりセミナー	前期2日 後期2日	団体、学校、企業等において、中堅的役割を担っているもの	「本県の総合的理解」「自己の分析と開発」「発想法」等について学習するとともに異業種間の人的ネットワークを組織する。	青森県について思うこと システム思考から構造思考へ トータルパスンへの道(1)～(3) 歴史に学ぶリーダー像 若者イメージの青森像 地域診断はモザイク視点で 交流パーティ	講義 講義・質疑 講義・討議 グループ演習・実践発表 講義 講義・討議 講義・演習 交流会
4年度	クリエートあおもりセミナー	3日	職場や地域にあって中堅的な役割を担っている者	「本県の総合的理解」「自己の分析と開発」「リーダーシップと人間関係」等について学習するとともに異業種間の人的ネットワークを組織する。	青森県について思うこと 夢を実現するための行動サイクル リーダーシップと人間関係 ～ラポールを生む PASS 理論～ ラポールを生むための交流パーティー 調査が語る「県民のすがた」 21世紀への視点	講義 講義・討議 講義・討議 演習 インタビュー・ダイアログ 講義
5年度	クリエートあおもりセミナー	3日	団体、学校、企業等において、中堅的役割を担っているもの	「本県の総合的理解」「自己の分析と開発」「発想法」等について学習するとともに異業種間の人的ネットワークを組織する。	青森県について思うこと 夢を実現するための道 リーダーシップと人間関係 調査から見た青森県 揺れ動くヨーロッパ情勢と日本 異業種交流パーティー	講話 講義・演習 講義 討議 講話
6年度	クリエートあおもりセミナー	3日	職場や地域にあって中堅的な役割を担っている者	「本県の総合的理解」「創造性を高め、仕事に活かす技法」「企画構成を身につける技法」などについて学習するとともに異業種間の人的ネットワークを組織する。	スイスと日本、そして青森 新しい型を生み出すエネルギー～創造性の引き出しと伸ばし方～ 若い世代に魅力を感じさせる青森県のイメージアップ 青森県の住みやすさ 新しい自分を探る～自己能力をより自由に発揮するためのコミュニケーション能力(1)(2)～ 新しい時流をつかむ ～中国は世界一の経済大国になるか？～	講話 講義・演習 インタビュー・ダイアログ 講話 講義・演習 講話
7年度	クリエートあおもりセミナー	前期2日 後期2日	職場や地域にあって中堅的な役割を担っている者	「本県の総合的理解」「創造性を高め、仕事に活かす技法」「企画構成を身につける技法」などについて学習するとともに異業種間の人的ネットワークを組織する。	活気ある青森県に必要なもの あらゆる生活場面で活用できるコミュニケーション 青森県の魅力づくりと人・自然・文化～行ってみたい住んでみたい青森県～ 活力ある青森のために～人・自然・文化～ 国際化時代への展望と情報ネットワーク 創造力～変化の時代を乗り切る発想法 チャレンジ会社のチャレンジ心	講話 講義・演習 インタビュー・ダイアログ 講話 講演 講義・演習 ケース・スタディ
8年度	クリエートあおもりセミナー	前期2日 後期2日	おおむね20～40代で職場や地域において中堅的な役割を担っている者	「21世紀青森県の展望」「青森県の新しい魅力づくり」「積極的な情報受・発信」などについて学習し、異業種間の人的ネットワークを形成する。	企業活性化の条件 ディベート初級講座～21世紀のコミュニケーション～ 青森の魅力づくりと人・自然文化～21世紀の情報発信～ 一周遅れの最先端と地域振興 アイデア発送技法～21世紀の創造力～ 企業をささえる創造力 メディア社会と人間の身体	講演 演習 パネルディスカッション 講義・討議 演習 ケース・スタディ 講演

クリエートあおもりセミナーからパワフル AOMORI! 創造塾までの移り変わり 2 (平成9年～15年度)

年度	事業名	期間	対象	内容	学習プログラム	学習形態
9年度	クリエートあおもりセミナー	前期2日 後期2日	職場や地域にあって中堅的な役割を担っている者	「21世紀青森県の展望」「青森県の新しい魅力づくり」「積極的な情報の受・発信」などについて学習し、異業種間の人的ネットワークを形成する。	EQーその潜在力の伸ばし方	講演
					21世紀の日本に見えるもの	講演
					地域振興とメディアの役割	講義
					能力開発講座「やわらかアタマの創造」	講義・演習
					絵本の里づくり ～北海道剣淵町が試みた発送の転換～ 21世紀に生きる青森県人の条件	ケース・スタディ
提案! 21世紀のあおもり(4分科会)	A:「北の文化」の創造 B:メディア革命と青森県 C:グリーンツーリズムと観光立県 D:交通網整備への道 全体会					
10年度	クリエートあおもりセミナー	前期2日 後期2日	21世紀の青森県を担う若手及び中堅指導者	コミュニケーションやネットワークづくりの能力を培い、個人の資質を活性化させることによって、21世紀の青森県のリーダーの育成を図るための研修	路上観察学入門	公開講演
					心をつなぐコミュニケーション	ワークショップ
					ネットワークづくりの極意	ワークショップ
					”市民手作り植物園”構想	講演
					エコミュージアムとしての青森県を考える	パネルディスカッション
					エコミュージアム AOMORI! の姿	グループ討議
					エコロールプレイしてみよう	ロールプレイゲーム
					覚醒のネットワーク	公開講演
11年度	あしたのネットワーク・セミナー	前期2日 後期2日	21世紀の青森県を担う若手及び中堅指導者	個人の資質を活性化させ、コミュニケーションやネットワークづくりの能力を培うことにより、青森県のリーダーの育成を図るための研修	プラスαの発想法	基調講演
					自己を見つめる	ワークショップ
					ネットワークと発信	講義
					「発」・「(見) (掘) (展) (信)」	パネル・フォーラム
					自己肯定感情を高める	ワークショップ
						ミニコンサート・ティータイム
					青森県のホスピタリティを生かす	講演
ネットワークのスキルアップ	ワークショップ					
12年度	あしたのネットワーク・セミナー	3日	21世紀の青森県を担う若手及び中堅指導者	自己を分析し開発していける能力、多角的な視点を持つことにより円滑な人間関係を形成できる能力を培うとともに、異業種間のネットワークを形成するための研修	自己再発見とプレゼンテーション	基調講演
					リーダーシップの効果的な発揮について	ワークショップ
					新鮮な発想とネットワークキング I・II	ワークショップ
					自分を見つめ自分を開く I・II	ワークショップ
13年度	あしたのネットワーク・セミナー	前期2日 後期2日	青森県を担う若手及び中堅指導者	自己を分析し開発していける能力、多角的な視点を持つことにより円滑な人間関係を形成できる能力を培うとともに、異業種間のネットワークを形成するための研修	「未来を開く」創造性の引き出し方と伸ばし方	基調講演
					リーダーシップと人間関係	講義・演習・ワークショップ
					自己能力をより自由に発揮するためのコミュニケーション能力	講義・演習・ワークショップ
					新しい自分を探る	講義・演習
					豊かな明日を創る心	講義・演習・ワークショップ
					新しい時流をつかむ	講義・演習・ワークショップ
14年度	あしたのネットワーク・セミナー	前期2日 後期2日	青森県を担う若手及び中堅指導者	自己を分析し開発していける能力、多角的な視点を持つことにより円滑な人間関係を形成できる能力を培うとともに、異業種間のネットワークを形成するための研修	新世紀をつくるプラスαの発想法	基調講演
					自己を磨く	講義・演習・ワークショップ
					仕事に生かす・人を動かすコミュニケーション～出会いたい、もうひとつの生き方に～	講義・演習・ワークショップ
					異業種間のネットワークはどのようにするか	講義・演習・ワークショップ
					ネットワークのスキルアップ	講義・演習・ワークショップ
15年度	あしたのネットワーク・セミナー	前期2日 後期2日	青森県を担う若手及び中堅指導者	自己を分析し開発していける能力、多角的な視点を持つことにより円滑な人間関係を形成できる能力を培うとともに、異業種間のネットワークを形成するための研修	自己再発見とプレゼンテーション～柔軟な思考を生み出すために～	講義・演習・ワークショップ
					自分の可能性を探る ～自分の潜在感を見つめ自分を開く～	講義・演習・ワークショップ
					新時代を生き抜く～自分の存在価値を見つめ直す～	講義・演習・ワークショップ
					豊かなネットワークを創り広げるスキル ～変化の時代に求められるネットワーク～	講義・演習・ワークショップ

クリエイトあおもりセミナーからパワフル AOMORI ! 創造塾までの移り変わり 3 (平成 16 年～21 年度)

年度	事業名	期間	対象	内容	学習プログラム	学習形態
16 年度	あしたのネットワーク・セミナー	前期2日 後期2日	青森県を担う若手及び中堅指導者	職場や地域において円滑でゆたかな人間関係を築くためのコミュニケーション能力を高めることを通して、異業種間の人的ネットワークを形成するための研修	人間関係とコミュニケーション	講義・演習・ワークショップ
					対人折衝能力を高める心構え	講義・演習・ワークショップ
					職場や地域におけるネットワークづくり	講義・演習・ワークショップ
					異業種間のネットワークをつくるには	講義・演習・ワークショップ
17 年度	あしたのネットワーク・セミナー	前期2日 後期2日	青森県を担う若手及び中堅指導者	職場や地域において円滑でゆたかな人間関係を築くためのコミュニケーション能力を高めることを通して、異業種間の人的ネットワークを形成するための研修	コミュニケーション基礎理論	講義・演習
					コミュニケーションの技術向上	講義・演習
					異業種間交流の進め方・異業種間交流の実践例	講義・演習
					これからの異業種間ネットワーク	講義・演習
18 年度	あしたのネットワーク・セミナー	前期2日 後期2日	青森県を担う若手及び中堅指導者	職場環境づくりや地域づくりに積極的に貢献できる人財を養成するため、円滑で豊かな人間関係の築き方及び異業種間人的ネットワーク形成に向けたコミュニケーション能力の在り方について研修	コミュニケーションの基礎理論	講義・演習
					コミュニケーションの技術向上 ～アサーティブネスへようこそ～	講義・演習
					継続する異業種間ネットワークのノウハウ ～隣接する秋田県の実践例から～	事例研究 (事例発表3例)
					私が出会った魅力的な変人・奇人・才人たち ～出会いが多いほど仕事も人生も楽しくなる～	交流会
					情報革命時代の地域づくりと異業種間ネットワーク	講義・演習
青森県異業種間ネットワークへの展望	講義					

19 年度	パワフル AOMORI ! 創造セミナー	5日+活動実践	地域おこしやまちづくりに興味関心のある青年及び県民	リーダーシップ・コーチ力を高める理論学習や、それらの学習成果を活かした活動実践を通して、地域資源を活かした企画・運営能力を習得することから、地域のコミュニティを回復させ、活気ある地域づくりを目指して、主体的に取り組むプレーヤーやリーダーを育成する。	パワフル AOMORI ! 創造セミナーについて	オリエンテーション
					コーチ力が生み出す人間力・社会力	公開講演
					地方からの発信 ～仕事は楽しく、いい仲間づくり・街づくり～	事例研究
					地域おこし事例に学ぶ ～農村の活性化を目指し「食」と「農」をつなぐ～	
					地域特性を活かした実践計画 ～課題解決の分析と方策～	演習
						インターンシップ
					おらほの田舎スイーツコンテスト	活動実践
おらほの田舎スイーツコンテスト報告	活動報告会					
20 年度	パワフル AOMORI ! 創造セミナー	6日+活動実践	地域おこしやまちづくりに興味関心のある青年及び県民	地域を元気にしたい人を対象に、リーダーシップ・コーチ力を高める理論学習・演習、さらにはインターンシップ・活動実践を行うことで、活気ある地域づくりに取り組むプレーヤーやリーダーを養成し、地域コミュニティの回復を図る。	地域おこし・街づくりのノウハウ	講義・演習
					理屈こねる前に、まんず動け！ ～まちおこしゲリラあおもり組に学ぶ～	講義
					昭和の町づくり～隣近所が肩を寄せ合って、助け合いながら生きてきた昭和～	講義
					念ずれば夢かなう！ ～「三方よし」の経営哲学で地域共生・地域貢献～	公開講演
					地域特性を活かした実践計画	講義・演習
					おらほの田舎スイーツコンテスト	活動実践
					津軽地域活性化応援ワークショップ	活動実践
実践活動の報告と交流会	活動報告会・講義					
21 年度	パワフル AOMORI ! 創造セミナー	6日+活動実践	地域おこしやまちづくりに興味関心のある青年及び県民	地域を元気にしたい人を対象に、リーダーシップ・コーチ力を高める理論学習・演習、さらにはインターンシップ・活動実践を行うことで、活気ある地域づくりに取り組むプレーヤーやリーダーを養成し、地域コミュニティの回復を図る。	創造セミナーについて	オリエンテーション
					オバマを勝手に応援する会ハワイに行く ～小浜市まちおこしに学ぶ～	公開講演
					GOGO!さば家族～遊び心たっぷりの真剣勝負！～	講義
					「青森を元気に！」	公開シンポジウム
					地域応援隊結成に向けて	講演・演習
					商品化に向けたノウハウ	講義・演習
					県内活動実践者のもとでの活動体験	インターンシップ
					おらほの田舎スイーツコンテスト	活動実践
					沿線地域散策モデルツアー	活動実践
あおもりオーロラプロジェクト	活動実践					
実践活動の報告と交流会 ～プレゼンテーションの実際・青森の元気を～	活動報告会・講義					

クリエイトあおもりセミナーからパワフル AOMORI ! 創造塾までの移り変わり 4 (平成 22 年～26 年度)

年度	事業名	期間	対象	内容	学習プログラム	学習形態
22 年度	パワフル AOMORI ! 創造セミナー	6日間+活動実践	地域社会の課題解決や市民活動に主体的に取り組む意欲のある県民	地域・青森を元気にしたい人を対象に、フィールドワークによる地域課題・生活課題・社会問題に関する「調査」「解決のための方策」「実践」を通し、新しい地域づくりに取り組む“人間力”(地域プロモーション・情報発信・ネットワーク・情熱)を兼ね備えたブレイヤーを育成やリーダーを育成する。	創造セミナーについて	オリエンテーション
					「世界をつなぐ光の森！」～風の色・雲の音・木の匂い・人のぬくもり～	公開講演
					「地域プロデューサーに学ぶ」～地域に根ざしたまちづくり活動～	講義
					フィールドワークのノウハウ	講義
					フィールドワーク	
					高校生パフォーマンスライブ	活動実践
					プレゼンテーション実際	活動報告会・講義
地域づくりの可能性						
23 年度	パワフル AOMORI ! 創造セミナー	8日+活動実践	まちおこし・地域づくりに主体的に取り組む意欲のある県民	フィールドワークによる地域課題・生活課題・社会問題に関する「調査」「解決のための方策」「実践」を通し、新しい地域づくりに取り組む“人間力”のあるリーダーを育成する。	「ご当地グルメを活かした地域づくり」	講演
					「地域活性化に必要なものとは」	パネルトーク
					「プレゼンテーションのあれこれ」	講義
					「まち歩きのススメ 2011」	講義
					フィールドワーク	
					「おらほの地域を元気にする知恵とワザ」	講義・演習
					「企画作り」	演習
					今日ほどさいぐ情報～津軽編～	活動実践
					わら細工人形作り・人形相撲大会	活動実践
					土手町表・裏～街を再発見する～	活動実践
					十三夜の宴	活動実践
					しゃべり場 in 八戸	活動実践
					パフォーマンスライブ 2nd	活動実践
					地域づくりの可能性	活動実践発表・交流会
24 年度	パワフル AOMORI ! 創造塾	9日+活動実践	県南地方在住の地域づくり活動に意欲がある方(20～40歳代)	新たな活動者の発掘と育成、仲間づくりの促進やネットワーク(つながり)の形成・強化、活動の活性化を目的とし、対象地域を絞り2年間をかけての理論学習や活動実践等の研修を通して、地域づくりに取り組む活動者を育成する。	「『宮コン』から学ぶ地域づくり」	講演
					「超神ネイガーにおける地域開拓法」	講義
					「まちづくりとプロデューサー」	パネルトーク
					「フィールドワークのノウハウ」～まちの見方、地域財産の見つけ方～	講義・演習
					「行列のできる講座と思わず手に取るチラシの作り方」	講義・演習
					「地域を元気にするコミュニケーション戦略」	講義・演習
					「助成金申請・プレゼンのコツ」	講義・演習
					魅力ある地域とは ～「資源」ではなく「価値」～	講義・演習
					「先輩の活動から学ぶ」	事例研究
					「魅力開発ノウハウ」(モデル地域企画づくり)	講義・演習
					パフォーマンスライブ	活動実践
25 年度	パワフル AOMORI ! 創造塾	1年生 7日+活動実践	県南地方在住の地域づくり活動に意欲がある方(20～40歳代)	新たな活動者の発掘と育成、仲間づくりの促進やネットワーク(つながり)の形成・強化、活動の活性化を目的とし、対象地域を絞り2年間をかけての理論学習や活動実践等の研修を通して、地域づくりに取り組む活動者を育成する。	「創造塾 基調講演」	講演
					「わたしがことをおこしたとき」	パネルトーク
					「フィールドワークのノウハウ」～まちの見方、地域財産の見つけ方～	講義・演習
					「思わず手に取るチラシの作り方」	講義・演習
					「地域を元気にする総合戦略～先輩の活動から～」	講義・演習
		2年生 4日+活動実践			「自分の未使用ポテンシャルを発揮するには」	講義・演習
					「先輩の活動から学ぶ」	事例研究
					「モデル地域企画作り」	講義・演習
					「津軽クエスト」	活動実践
					「珍百景 book」作成	活動実践
26 年度	パワフル AOMORI ! 創造塾	2年生 活動実践 公開講座 3日	津軽地方在住の地域づくり活動に意欲がある方(20～40歳代)	新たな活動者の発掘と育成、仲間づくりの促進やネットワーク(つながり)の形成・強化、活動の活性化を目的とし、対象地域を絞り2年間をかけての理論学習や活動実践等の研修を通して、地域づくりに取り組む活動者を育成する。	「AOMORI の元気を創る」	公開講座
					「つるたクエスト」	活動実践
					「想いがあれば地域は動く」	公開講座
					「絆が未来を創る」	公開講座
					「未来の AOMORI ! を地域から」	公開講座

Ⅲ 現行事業の概要

1 研修体系について

「パワフル AOMORI!創造塾」の研修体系は、前身の「パワフル AOMORI!創造セミナー」での成果と課題を踏まえ、以下のポイントを押さえつつ構成することとした。

- ・研修で身につけるスキルを明確にし、そのスキルを「学ぶ」→「活かす」という流れを見通すことができる研修計画であること。
- ・地域に根ざした活動者の発掘・育成、仲間づくりの促進やネットワークの形成・強化、活動の活性化には、地域を絞った、より地域密着型の事業展開であること。
- ・地域活動者としての資質を高められるように、座学と活動実践を組み込みながら、2年間かけてじっくり育成すること。

これらを受けて、開催場所は、平成 24 年度は県南地方、平成 25 年度は津軽地方とし、1年目を基礎実践コース（理論学習に始まり、フィールドワーク等を通して、自分自身の知識を広げながら、塾生で力を合わせ、活動実践を行うという流れ）、2年目を創造実践コース（活動実践を中心に行い、塾を卒業後もそれぞれの地域で活躍していくために必要な実践力をさらに高め、人的ネットワークの構築を図るとい流れ）とし、下記の表のように計画した。

1年目 基礎実践コース	
理論学習やモデル地域の実践・フィールドワークなどを通して、活動者として必要な力を身につける。	
a	知識を広げる学び ・理論学習 ・フィールドワーク ・講演聴講 ・事例研究
b	実践力を高める学び ・しゃべり場 ・フィールドワーク ・企画立案 ・活動実践
c	活動者としての幅を広げる学び ・他のイベントや研修会等への参加

2年目 創造実践コース	
グループごとの実践などを通して、ネットワーク形成や実践力を身につける。	
a	ネットワークを広げる学び ・アドバイザー実践
b	実践力を高める学び ・グループ活動 (企画作成, 実践, ふりかえり)
c	互いを磨き合う学び ・進行状況の報告, 意見交換
d	自立への意欲を高める学び ・成果発表, 交流会

2 塾生について

前身の「創造セミナー」では、毎年受講生を募集し、1年単位で研修を行ってきたが、継続受講者が多く新規受講生が少ない、年齢層が高い、活動者としてではなく生涯学習者として参加する方が多い等の課題があった。

これを受け「創造塾」では、対象を県内在住

で、地域づくり活動に意欲がある方(20~40歳代)とし、新たな地域活動者の発掘に重きを置いた。

周知活動については、募集ポスター・ちらしを公民館等の社会教育施設や大型商業施設等に配布した。また、市町村教育委員会や関係団体等を訪問し、関係者への入塾を呼びかけた。塾生の編成は次の通りである。



24年度ちらし(表)



25年度ちらし(裏)

平成 24 年度入塾 県南地方塾生				
区分	在住市町村	人数	性別	
			男性	女性
1	三沢市	3	2	1
2	十和田市	2	1	1
3	七戸町	1		1
4	三戸町	3	2	1
合計		9	5	4

平成 25 年度入塾 津軽地方塾生				
区分	在住市町村	人数	性別	
			男性	女性
1	五所川原市	3	1	2
2	つがる市	1		1
3	鶴田町	2	1	1
4	弘前市	12	8	4
5	黒石市	3	3	
6	平川市	2	2	
7	田舎館村	2	1	1
合計		25	16	9

入塾のきっかけに関しては、

- ・ 創造セミナーからの継続
- ・ 市町村の職員研修として
- ・ ちらし・ポスターを見て
- ・ センター関係者からの紹介
- ・ 教育事務所からの紹介
- ・ 講師からの紹介
- ・ 入塾者から紹介

などが挙げられる。また、各年度の 1 回目の講座が公開形式となっており、そこに参加したことがきっかけで、入塾するケースもあった。職種も公務員、自営業、会社員等多岐に渡る。年齢についても 20 代～40 代まで幅広く、30 代が最も多い。

3 研修内容について

(1) 平成 24 年度の研修内容

事業開始年度である平成 24 年度は、県南地方の 1 年生のみを対象に実施した（津軽地方は、平成 25 年度から）。講師を県内外から招聘し、塾生は、地域活動に関わる理論やノウハウを学んだ。そして、モデル地域活動実践として、「パフォーマンスライブ」「しおりライブ」を実施した。

6/23 公開講演
「『宮コン』から学ぶ地域づくり」
宮コン実行委員長 佐々木 均 氏








7/14 講義・パネルトーク
「超神ネイガーにおける地域開拓法」
「まちづくりとプロデューサー」
F2-ZONE 代表 海老名 保 氏
まちおこしゲリラあおぞら組
組長 島 康子 氏



7/21 講義・演習
「フィールドワークのノウハウ」
～まちの見方、地域財産の見つけ方～
八戸工業高等専門学校
教授 河村 信治 氏



8/4 武者修行
「寺山修司記念館フェスティバル」



<p>8/18 講義・演習 8/19 魅力ある地域とは ～「資源」ではなく「価値」～ ビズデザイン株式会社 代表取締役 木村 乃 氏</p>		<p>10/20 事例研究 「先輩の活動から学ぶ」 田舎スイーツコンテスト 水戸 光宣 氏 パフォーマンスライブ 2nd 佐々木 弘高 氏 わら細工・人形相撲大会 柏谷 祐美子 氏 つがる市物産館ギャラリー各種イベント 野崎 克行 氏 沿線地域散策モデルツアー 福田 均 氏</p> 
<p>9/15 講義・演習 「行列のできる講座と思わず手に取るチラシの作り方」 NPO法人男女共同参画おおた 理事長 坂田 静香 氏</p>		<p>1/21 モデル地域フィールドワーク ・青い森鉄道まつり開業 10 周年イベント見学 ・アップルドーム 「馬場のぼるの部屋」見学 ・フィールドワーク(まち歩き) ・ワークショップ ・道の駅さんのへ見学</p> 
<p>9/30 講義・演習 「地域を元気にするコミュニケーション戦略」 青森県観光国際戦略局 まるごとあおもり情報発信チーム チームリーダー 秋田 佳紀 氏</p>		<p>1/5 モデル地域活動実践グループ会議 1</p>
<p>10/14</p>	<p>武者修行「パパママフェスタ 2012」</p>	


1 / 19	<p>講義・演習 「活動実践講評」 「助成金申請・プレゼンのコツ」 NPO 法人 ACTY 理事長 町田 直子 氏</p> 
1 / 27	<p>モデル地域活動実践グループ会議 2 モデル地域活動実践 「2012 パフォーマンスライブ」の実践</p> 
2 / 11	<p>モデル地域活動実践 「ハートフルライブ」の実践</p> 


(2) 平成 25 年度の研修内容


事業 2 年目である平成 25 年度は、津軽地方 1 年生が始まり、県南地方塾生が 2 年生となった。
津軽地方塾生については、昨年度と同様、地域活動に係る理論、ノウハウ等を学んだ。県南地方塾生については、活動実践を中心とした内容


となった。
ア 津軽地方 1 年生

7 / 6	<p>公開講演 「創発からのまち育て」 弘前大学教育学部 副学部長・教授 北原 啓司 氏 パネルトーク 「わたしがことをおこしたとき」 tecoLLC. 代表 立木 祥一郎 氏 巨大アップルパイギネスに挑戦する会 事務局長 南 直之進 氏 町おこしゲリラ集団「あおぞら組」 代表 島 康子 氏</p> 
7 / 14	<p>講義・演習 「フィールドワークのノウハウ」 ～まちの見方、地域財産の見つけ方～ 公益社団法人 弘前観光コンベンション協会 事務局長（弘前路地裏探偵団 団長） 坂本 崇 氏</p> 

8/17	<p>講義・演習 「自分の未使用ポテンシャルを發揮するには」 弘前大学教育学部 副学部長・教授 北原 啓司 氏 弘前下土手町商店街振興組合 (TEKUTEKU編集部代表) 事務局長 宮川 克己 氏 「フリーペーパー作り」 弘前下土手町商店街振興組合 (TEKUTEKU編集部代表) 事務局長 宮川 克己 氏</p> 
------	--

9/14	<p>講義・演習 「思わず手に取るチラシの作り方」 日本人財発掘育成協会 理事 水戸 光宣 氏</p> 
------	---


9/28	<p>講義・演習・事例研究 「地域を元気にする総合戦略 ～先輩の活動から～」 プロジェクトおおわに事業協同組合 副理事長 相馬 康穂 氏</p> 
------	---

10/19	<p>事例研究 「先輩の活動から学ぶ」 巨大アップルパイギネスに挑戦する会 事務局長 南 直之進 氏 創造塾2年生 岩本 ヤヨエ 氏 佐々木 弘高 氏</p> 
-------	--

11/2	<p>グループ会議 1 「モデル地域実践活動について」</p>
12/7	<p>グループ会議 2 「モデル地域実践活動について」</p>
12/14	<p>グループ会議 3 「モデル地域実践活動リハーサル」</p>

1 / 19	<p>モデル地域活動実践 「津軽クエスト～1月19日だけの大冒険～inヒロロスクエア」</p> 
3 / 8	<p>公開講演 「AOMORI!の元気を創る！」 株式会社オアゾ 代表取締役社長 松田 龍太郎 氏</p> 


イ 県南地方2年生



6 / 29	<p>グループ会議 1 「今年度の活動計画について」</p>
8 / 4	<p>グループ会議 2 「今年度の実践活動について」</p>
8 / 17	<p>アドバイザー実践 「フリーペーパー作り」</p> 

8 / 31	<p>演習 「地域実践に係る計画について」 青森中央学院大学 講師 佐藤 淳 氏</p> 
10 / 19	<p>アドバイザー実践 「先輩の活動から学ぶ」</p> 
3 / 8	<p>公開講演 「AOMORI!の元気を創る！」 株式会社オアゾ 代表取締役社長 松田 龍太郎 氏</p>

(3) 平成26年度の研修内容

前年度に県南地方塾生が卒業したため、平成26年度は、津軽地方塾生2年生のみの活動である。そして、平成26年度から公開講座が3回設定され、塾生のみならず、一般県民が学習できる機会を設定した。

7/19	<p>公開講座 「想いがあれば地域は動く」</p> <p>soop! 代表 清水 圭子 氏 9根 代表 原田 惇 氏 復興 girls and boys* 中條 奈菜花 氏 香木 なつみ 氏</p> <p>輪茶プロジェクト 代表 石岡 大輔 氏</p> <p>コーディネーター フリーアナウンサー 増田 由美子 氏</p> 
9/3	<p>グループ会議 1 「今年度の活動実践について」</p>
9/20	<p>公開講座 「絆が未来を創る」</p> <p>Misawa Art Project 代表 田村 宣喜 氏</p> <p>TNネットワーク チーフリーダー 三浦 貴志 氏</p> <p>Moonbow 代表 石田 朋子 氏</p> <p>GET UP! PROJECT 代表 金澤 大輔 氏</p> <p>コーディネーター フリーアナウンサー 増田 由美子 氏</p> 
10/9	<p>グループ会議 2 「今年度の活動実践について」</p>
11/2	<p>グループ会議 3 「つるたクエスト前日リハーサル」</p>

11/3	<p>地域活動実践 「つるたクエスト」</p> 
1/10	<p>公開講座 「未来の AOMORI! を地域から」</p> <p>宇都宮大学地域連携教育研究センター 教授 廣瀬 隆人 氏</p> <p>soop! 代表 清水 圭子 氏 輪茶プロジェクト 代表 石岡 大輔 氏</p> <p>Misawa Art Project 代表 田村 宣喜 氏</p> 

(4) 活動実践での取組内容

活動実践は、「創造セミナー」から講座体系に組み込まれたものである。前出した「田舎スイーツコンテスト」での新たな活動者の創出の成果を踏まえ、「創造塾」でも体系の中に組み込まれ、塾生1年次に1回、2年次に1回行うことになっている。塾生として初めて出会ったメンバーで、実践に向けた企画・準備を行い、運営をする体験は、理論やノウハウを学ぶ座学とともに「創造塾」の大事な柱となっている。

ここでは、これまで実施した活動実践について紹介していく。

ア パフォーマンスライブ

(平成 25 年 2 月 10 日)

「パフォーマンスライブ」は、「創造セミナー」時の平成 22 年度に、セミナー受講生によって初めて開催された。企画から演出、司会、出演まで全てを高校生が手掛け、表現する喜びや世代を超えた交流を体験してもらうことを狙いとして実施している。その当時、中心となって活動したメンバーが、「創造塾」に入塾したこともあり、県南地方 1 年生の活動実践として引き続き実施することとなった。



(塾生と高校生による事前打ち合わせの様子)

当日運営を塾生と高校生が「協働」で行うということもあり、事前の打合せは、綿密に 2 度行われた。また、裏方も塾生と高校生が行うということで、照明や音響などの機械も自分たちで操作することになる。もちろん初めてだったり、慣れていなかったりということもあり、前日リハーサルでは、塾生や高校生が業者の方から説明を聞き、試行錯誤しながら作業する姿が見られた。

当日は、塾生の他、ボランティアを含めて 35 人で運営し、44 人の出演者が歌やダンス等それぞれの想いをパフォーマンスした。参観者 189 人だった。参観者からは、「皆さんの懸命な姿に感動し、パワーをもらった」「高校生らしい若々しさが感じられ、出演者だけでなく、スタッフの皆さんの元気で活力ある創作・発表態度が好印象でした」等の好意的な感想が多

く、運営として参加した高校生からも「裏方をする機会が少ないため、いい経験になった」「次回も是非参加したい」という感想が多かった。



(機器の使用方法的説明を聞く高校生)



(ライブの様子)

このパフォーマンスライブは、平成 25 年度も第 4 回目が実施された。県南地方の塾生は、まだ卒業してはいなかったが、「創造塾」の活動実践としてではなく、団体を作り、独自の活動として行った。活動資金については、地元の祭りに店を出し、売上げを資金にするという形で集めた。ボランティアの高校生もこれまでのネットワークを生かして集めた。4 回目の好評のうちに終了し、第 5 回目も実施することになっている。

イ 珍百景 book

「珍百景 book」は、県南地方塾生による 2 年目の活動実践である。いわゆるイベントを実施するのではなく、これまでに学んだ地域の特徴、地域財産再発



珍百景 book 表紙

な広さの場所でリハーサルしてみたりして、不安要素を解消していった。



(打ち合わせの様子)



(リハーサルの様子)

本番は、弘前市のヒロロスクエアが会場であった。塾生がデザインし、周知したポスター・ちらしの効果もあり、大雪にも関わらず、開始前から受付をするグループもあった。

当日の運営は、塾生の他、塾生が声をかけて集まった協力者、センター職員で行った。

ゲームの性質上、1グループに1人のコーディネーターが必要だったが、それが逆に、参加者とコーディネーターのコミュニケーションを生んでいたのが印象的であった。

別な用事でヒロロに來ていたが、クエストの様子を見て、急遽参加するケースもあり、最終的に150名を超える方々にゲームを楽しんでもらえることができた。参加者からは次の開催の声をたくさんいただき、これまで準備等で苦労してきた塾生にとっても達成感を感じることができたのではないと思う。



(津軽クエストの様子)



エ つるたクエスト （平成 26 年 11 月 3 日）

1年目の「津軽クエスト」に引き続き、2年目に実施したのが、「つるたクエスト」である。「津軽クエスト」の実施直後から「次は自分の市町村でやってみたい」という塾生の声が複数あった。2年目に入り、鶴田町在住の塾生の交渉により、毎年鶴田町で開催されている「鶴田町子どもの祭典」の中で実施できることとなった。

「鶴田町子どもの祭典」は、鶴田町子ども会育成連絡協議会が主催で毎年開催しており、平成26年度で21回目を数え、町内各地区の子ども会のメンバーや、支える人たちが一堂に集まって手作りイベントを楽しむ、年に1度のお祭りである。

そのプログラムの一つとして、「つるたクエスト」を実施することとなった。基本的なルールに変更はないものの、参加者や会場、時間等が1回目とは異なるため、「子どもの祭典」を主催する鶴田町子ども会育成連絡協議会との打合せを念入りに行い、その結果、次のような変更点があった。

- ・津軽全域から作ったクイズを鶴田町に関するクイズにする。クイズについてはジュニアリーダー等に考えてもらう。
- ・朝の時点で160名を超える子どもたちが集まっているので、子どもたちを4組に分け、時間差でクエストを体験してもらう。待っている組は、別会場でアトラクションをする。
- ・1グループに1人必要なコーディネーターについては、ジュニアリーダーにお願いし、クエストをしている以外の時間も担当として、一緒に行動してもらう。



（子どもの祭典に集まった子どもたち）

11月3日当日は、「子どもの祭典」を楽しみにしていた町内の子どもたち約160人が集まった。クエストのコーディネーターが足りないということで、鶴田町のジュニアリーダーの他にも板柳町のジュニアリーダーや塾生の協力者も応援に駆けつけてくれた。

クエストが始まると、昨年度と同じように、子どもたちは、協力してクイズを解いたり、サイコロを振ったりして、クエストを実に楽しんでいた。ジュニアリーダーたちも初めてのコーディネーターにも関わらず、しっかり子どもたちを誘導することができた。

（つるたクエストの様子）



クエストを待っている子どもたちは、別会場で、塾生が考えた別のアトラクションをして楽しんだ。鶴田町にまつわる言葉が書かれた10枚のカードをアイウエオ順に並べ替えるという単純なゲームであったが、子どもたちは、グループで協力しながらゲームを楽しんでいた。



(アトラクションの様子)

これまでの「子どもの祭典」にはないプログラムということもあり、子どもたちはもちろん、保護者からも大変好評であった。

実施にあたり、教育委員会や子ども会育成連絡協議会には多大なご協力をいただき、感謝で一杯である。

(5) 公開講座について

平成24年度、平成25年度と計3回公開講座を実施し、塾生のみならず広く県民が地域づくりについて学ぶ機会を提供してきた。それをきっかけに入塾する参加者がいたり、次回の開催を望む声も多数あったりと大変好評であった。

平成26年度は、事業終了年度ということので新規の塾生は募集しないことになっていたのので、これまでに好評であった公開講座を設定し、県内及び県外で活躍している若手の地域活動実践者と実践事例を紹介し、交流する機会を設けることにより、県内各地域の新たな活動者の掘り起こしを目指すとともに、地域活動者のネットワーク強化と拡大を図ることとした。

また、実践事例をもとに検証し、今後の方向性を見出す機会を設けることで、地域活動推進者のスキル向上を図るとともに、来年度以後の受講生の掘り起こしを目指すこととした。

ア 第1回公開講座（平成26年7月19日）

テーマ「想いがあれば地域は動く」

～団体発足から地域活動を展開するまで～

1回目の公開講座では、青森、秋田、岩手で地域活動を実践している方々を招き、パネルディスカッション形式で実施し、団体発足から地域活動を展開するまでの経緯を中心にお話ししていただいた。

パネリストは、地元密着型で、「八戸市白銀町で面白いことをしよう！」と活動している soop! 代表の清水圭子氏、夫婦でプロジェクトを立ち上げ、秋田を活気づけたいと趣味でフリーペーパーの発行等をしている輪茶プロジェクト代表の石岡大輔氏、岩手被災地企業の商品を販売することで、復興を後押ししている岩手県立大学の復興 girls and boys* の中條奈菜花氏と香木なつみ氏、そして、平成24年度、平成25年度の県の重点事業「地域のつながり創造人育成事業」により、団体を結成し、地域活動を実践した東北町の上北9根代表原田惇氏であった。20～30代と若手であるが、それぞれが地域への熱い想いを持ち活動している様子は38名の参加者たちの共感を呼び、「一步を踏み出す勇気をもたらした」「若い人たちの実行力、行動力、思考力が地方を再生できると感じた」等の感想をいただいた。



(周知ポスター)



(第1回公開講座の様子)

イ 第2回公開講座（平成26年9月20日）

テーマ「絆が未来を創る」
～地域活動を展開する中で育まれた絆～

2回目の公開講座も1回目と同様、青森、秋田、岩手から実践者をお招きし、地域活動を展開する中で育まれた絆と今後の方向性をテーマにお話ししていただいた。

パネリストは、アートでまちを盛り上げようと、三沢中心街周辺にあるフレンドシップロードを会場にクリスマスイベント等を開催している Misawa Art Project 代表の田村宣喜氏、秋田県の鹿角市を元気にしようという思いから、音楽イベント等を実施している GETUP! PROJECT 代表の金澤大輔氏、盛岡町家が並ぶ町界隈の活性化を目指して、手づくり市『てどらんど』等を企画・運営している Moonbow 代表の石田朋子氏、そして、前回の原田氏と同じく「地域のつながり創造人育成事業」から黒石市のTNネットワークチーフリーダーの三浦貴志氏の4名であった。

子どもたちに自分たちの地域の良さを知ってもらうための工夫された事業企画、震災時にこれまでの活動で構築したネットワークを生かした被災地の支援、既存の事業と合同で開催することにより相乗効果を生む仕掛け、地域の各団体や個人とのネットワークを最大限生かした初の事業実施といった話を熱く語っていただいた。

高校生や既に地域活動をしている方など27名の参加者からは、「地域貢献の際に今回の内容を生かしたい」「将来の目標の参考になった」「地域に根ざした情報発信を通して、地域の魅力を伝えていきたい」などの感想が寄せられた。



（周知ポスター）



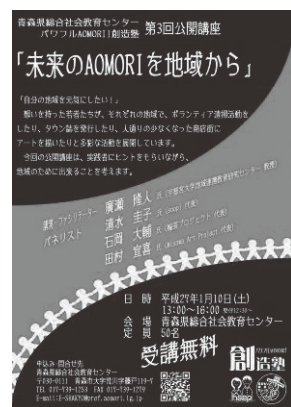
（第2回公開講座の様子）

ウ 第3回公開講座（平成27年1月10日）

テーマ「未来のAOMORI！を地域から」
～これまでの公開講座の総括と今後の方向性～

「未来のAOMORI！を地域から」と題し実施した第3回公開講座は、これまでの公開講座でお話しいただいた清水圭子氏、石岡大輔氏、田村宣喜氏を再び招き、これまでの実践発表や交流から未来の青森を創るために必要なことをディスカッションしていただき、コーディネーターの宇都宮大学地域連携教育研究センター教授の廣瀬隆人氏に、これからの地域活動に必要な視野と動向に対する的確な助言をいただいた。ここでは、参加者の生の感想をご紹介します。

- ・自分が楽しむことでまちづくりができて、人の輪も広がるというのは本当に素晴らしいことだと学ぶことができた。
- ・これからの活動の糧としてがんばっていきたいと思った。私たちができることを楽しくやっていきたい。
- ・魅力的なパネリストで楽しかった。最後の交流会のお陰で、詳しくお話を聞くことができてよかった。
- ・やるか、やらないかの違いなんだと思った。今日の話聞いて、私はやる人になりたいと思った。



（周知ポスター）

- ・やりたいと思った少人数から、まちづくりが始まるものなんだなと思った。新幹線が通る今別町も、もっと活発になるよう自分で何かできればと思った。



(第3回公開講座の様子)

エ 交流タイム

前出の参加者の感想にもあったが、今年度3回実施した公開講座には、「交流タイム」というものを設けている。これは、昨年度末に実施した公開講演「AOMORI!の元気を創る!」において、講師の松田龍太郎氏(株式会社オアズ代表取締役社長)に残っていただき、参加者と話をする時間を10分程度設定したのがヒントとなっている。高校生等が松田氏の所に駆け寄り、話をする姿を見て、講師と参加者、参加者同士が交流する場を設定することで、よりお互いの理解が深まりつつ、ネットワークの構築につながると考えた。

今年度3回実施した公開講座では、約30分間の「交流タイム」を設定し、参加者それぞれの市町村と氏名だけを記載した簡易名刺を1人10枚準備し、その名刺を交換し合う形で、よりスムーズに交流できるようにした。第1回では、名刺の裏に会話のきっかけとなるような指令を載せていたが、参加者たちは初めて会う隣の人や講師に率先して話しかけ盛り上がり、また違う人に話しかけ盛り上がりを繰り返しており、指令はほとんど必要なく、2回目からは名刺に記載しなかった。

アンケートからも「毎回この時間を設けて欲しい」「いろいろな人と話す時間があって楽しかった」等の交流タイムに好意的な回答が多く寄せられた。また、本物の名刺ではなく、市町村と名前だけの簡易名刺での名刺交換が、逆に気兼ねなく交換でき、効果的であるとの声もあった。

(交流タイムの様子)



IV 考察

1 研修体系について

(1) 研修期間について

意欲的な受講生たちにとっては、2年間共に活動することで、より強い連帯感(つながり)が生まれ、研修期間後も活動するケースもあり、効果的であったと考えられる。

一方で、研修が進むにつれ、不参加のケースが出てくるのも事実である。原因として考えられるのは、出産、離職、転職、結婚等の受講生の環境の変化によるものや塾生がイメージしていた研修と実際の研修とのギャップによるもの、そして本業の多忙等が挙げられる。

研修期間をどう設定するかは、非常に難しいが、設定した期間の結果、発生するメリットとデメリットをしっかりと想定し、より効果的に研修が進む期間を決定していかなければならない。

(2) 研修内容について

理論学習について、地域活動へのモチベーションアップに係る研修から始まることについては、アンケートの結果を見ても好意的な回答が多く、塾生の意欲の高まりも感じることで

県南地方では、塾生が新たな活動団体を作り、活動の幅を広げている。前出した「パフォーマンスライブ」がそれに当たるが、その他にも「イクメン・カジダン」事業も実施している。



(イクメン・カジダン養成講座の様子)

「子育ては、期間限定の特権。パパが育児や家事を楽しみながらできるようになれば、家庭には笑顔が絶えず、見ている周りも幸せに」そういった家庭を増やそうと平成 25 年度から実施しているこの「イクメン・カジダン養成講座」は、市民と行政の協働によるまちづくりを推進することを目的として三沢市が募集している「市民提案事業」に助成申請し、獲得した資金を元に実施しているものである。

これまで地域活動を実践していなかった塾生が中心となって講座を運営しており、まさに地域を元気にする人財が生まれ、塾を契機に地域活動に目覚め、発展していった事例である。

このように、塾生同士のつながりは、市町村の枠を超え、さらには塾生それぞれの活動の広がりを生むケースもあり、県域での地域活性化につながっていくとも考えられる。

(2) 塾生と講師のつながり

平成 25 年度の津軽地方での開催の場合、津軽地方で活躍する方々を講師として招聘し、さらに何度か研修に来ていただく形をとった。講師と塾生が元々交流のあるケースもあったが、身近にいる先輩というイメージで、深いつながりを形成することができた。県外などの著名な方を講師として招き研修するのももちろん有効であるが、塾生が卒業後も地域活動を行う際に、頼りにできる先輩とのつながりを運営側で意図して形成するのも大変有効であると思われる。

一方で、平成 24 年度の県南地方の場合は、

県外講師が多かったが、塾生が少なかったこともあり、講師と塾生のより深いつながりが生まれ、活動が広がったケースがある。1つ目は、塾生が塾とは別に企画・運営した「まちづくり人材発掘フォーラム」である。三沢市から助成を受け、実施したこのフォーラムには、「創造塾」で講師を務めた木村乃氏 (P14 参照) と海老名保氏 (P13 参照) を塾生が招き、開催したものである。



(まちづくり人材発掘フォーラムの様子)

2つ目は、そのフォーラムで行ったワークショップの際、一般参加者から出された『三沢の宝物』から海老名氏に取り上げ、誕生させた『ホッキーガイ』である。塾生が、地元有志(通称ホッキ人)を集め、ホッキーガイプロジェクトを設立。海老名氏もその熱意に応え、ホッキ貝をはじめ三沢の特産・特徴を込めた『ホッキーガイ』をデザインから衣装、小物に至るまで手作りで完成させた。平成 26 年 6 月には発表会見を行い、その後、三沢市内のイベントや塾生の講座等に出演し、徐々に認知され始め、今後の活躍が大いに期待される。まさに、塾生と講師のつながりが生んだご当地ヒーローである。



このように、平成 24 年度は、講師が県外の方であっても、その後の交流が続き、活動が発展した好例である。SNS の普及もあり、交流を続けやすい環境が整ってきているという理由もあるが、何より塾生時に受けた講座で、塾生が、講師に共感し今後もつながっていきたく

強く感じたのが、大きな理由として挙げられる。

今後事業を進めていくにあたり、受講生と講師のつながりをどれだけ深く形成できるか、運営を計画する上で、事業担当者の大変な力量であるといえる。

3 公開講座について

平成 24, 25 年度の研修の始めに設定した公開講座については、広く県民に研修の機会を提供するという趣旨と塾生を集めるという狙いがあった。結果、年代を問わず多くの方に参加いただき、公開講座をきっかけに入塾する方もいた。青森県総合社会教育センターの事業にまちづくりに関わる分野があり、県民誰もが学ぶことができるという認知度を上げ、公開講座をきっかけとして入塾し、新たな地域活動者を発掘するという意味で、始めに公開講座を実施することは、大変有効であった。

平成 25 年 3 月と平成 26 年度に実施した公開講座については、広く一般県民を対象として実施したが、先に述べた交流タイムの様子やアンケートの回答を見ても、年齢を問わず、参加者の地域づくり、地域活性化への関心、地域活動への意欲の高さを感じることができた。また、連続して受講する参加者も数名いたことから、「また参加したい」と思ってもらえるような内容であったと受け止めることができる。アンケートでの「将来、地域活動をしてみたい」「自分もがんばってみたい」等の回答からも見て取れるように、間接的に将来的な人財の発掘にもつながっていると考えられ、公開講座は有効であるとともに、参加者の心についた火を絶やさぬよう、今後も地域活動に関わる講座を実施し続けることがセンターの使命であると考えられる。

V まとめ

センター開所当時から脈々と受け継がれてきた人財育成事業は、その過程で、より地域づくりに携わる人財の発掘・育成へと移行してきた。「パワフル AOMORI！創造塾」に入り、受講生は、塾生としての活動を発展させ、独自の活動に至るケースも出現し、地域に根ざした活動者の発掘・育成に一定の成果を上げてきたと言える。そして何より、塾生同士や講師、活動に関わる関係者とのネットワークを形成するこ

とできたことこそが、最大の成果である。このネットワークは、今後、塾生それぞれが、地域活動を進めて行くにあたっての重要な礎になっていくものであろう。

平成 25 年 6 月に閣議決定された「第 2 期教育振興基本計画」では、教育行政の 4 つの基本的方向性の一つとして、「絆づくりと活力あるコミュニティの形成～社会が人を育み、人が社会をつくる好循環～」が示されている。その成果目標として「互助・共助による活力あるコミュニティの形成」が掲げられ、平成 25 年度文部科学白書では、成果指標として、「住民等の地域社会への参画度合いの向上」が設定されている。「パワフル AOMORI！創造塾」において、発掘・育成した人財の活動は、まさに地域社会への参画であり、今後も地域活動に関わる人財を継続的に発掘・育成していくことこそ、参画度の向上につながり、活力あるコミュニティの形成につながっていくと考える。

次年度以降は、これまでの成果と課題を受け、「講座」と「実践活動」の二つの柱に分けて、実施する予定である。「講座」については、これまで地域活動に関わる概論や事例研究、ノウハウ等を学ぶ対象を塾生としてきたが、県民一般を対象とし、広く学びの機会を提供する形で実施する。「実践活動」については、対象地域から希望者を募り、集まったメンバーによる地域活動実践を行い、実践を通して、新たな活動者の発掘を目指したい。実施にあたっては、開所以来蓄積してきた人財育成のノウハウ並びに人的ネットワークを最大限生かし、地域を元気にする人財を一人でも多く輩出し、これまで以上にパワフルな AOMORI！を創造していけるよう、次年度以降の事業を進めていきたいと考えている。

〈引用・参考文献〉

- ・クリエートあおもりセミナー学習概要
(青森県総合社会教育センター 平成 3 年～平成 10 年)
- ・あしたのネットワークセミナー学習概要
(青森県総合社会教育センター 平成 11 年、平成 13 年)
- ・第 2 期教育振興基本計画(文部科学省 平成 25 年)
- ・文部科学白書(文部科学省 平成 25 年)
- ・平成 26 年度青森県社会教育行政の方針と重点(青森県教育庁生涯学習課 平成 26 年)

職場体験等に係る学校と企業等の連携

～青森市における職場体験・インターンシップに係るアンケート調査からの一考察～

教育活動支援課 課長 大瀬 雅生
社会教育主事 小森 直樹

要 旨

県教育委員会では、平成 25 年度から教育行政における重要課題を 3 つの「施策の柱」にまとめ、1 つ目の柱として「キャリア教育の推進による人財育成」を掲げている。本研究は、学校・家庭・地域におけるキャリア教育の一層の充実を目指すため、青森市内の中学校・高等学校及び青森県教育支援プラットフォーム「我が社は学校教育サポーター」に登録し、職場体験・インターンシップ（以下「職場体験等」）を受け入れた実績のある企業・事業所・団体等（以下「企業等」）を対象に、アンケートによる職場体験等の現状と課題を調査し、学校と企業等双方の観点から分析を行い、考察を行うものである。

キーワード：キャリア教育，職場体験・インターンシップ，青森県教育支援プラットフォーム

目 次

I	はじめに	31
II	調査方法	32
III	アンケートによる調査結果	33
	1 学校編	
	2 企業等編	
IV	考察	50
	1 学校編	
	2 企業等編	
	3 学校と企業等編	
V	おわりに	53

I はじめに

1 背景

キャリア教育については、中央教育審議会(以下「中教審」)から平成11年12月16日に「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」(答申)が出され、その中で、学校教育と職業生活の接続の改善のための具体的方策として「中等教育修了後の進路の選択肢が多様化する中で、生徒が自己の個性を理解した上で、主体的に進路選択を行っていけるよう、キャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施。また、インターシップの促進等による体験的活動を重視」と記載されている。平成16年1月28日に「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」が出され、以降、手引き、ガイド等の作成など、数多くの取組が積極的に進められてきた。平成23年1月31日には中教審から「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(答申)が出され、幼児期の教育から高等教育までを通じたキャリア教育・職業教育の在り方がまとめられている。その後、キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査に関する報告書等が続けて出されている。

青森県教育委員会は、平成23年度の学校教育指導の方針と重点を、「進路指導の充実」から「キャリア教育の推進」に改訂し、一人一人の子どもたちが自らの生き方を考え、社会的・職業的自立ができるよう、必要な基盤となる資質、能力、態度の育成に努めることとなった。

特に、平成23年度には青森県独自の「キャリア教育の指針(総論編)」,平成24年度には「キャリアノート」の作成など、キャリア教育の取り組みを積極的に進めている。その中で、学校における教育活動を支援するため、生涯学習課では、平成24・25年度重点事業「地域の力で夢を育む教育支援プラットフォーム事業」を立ち上げ、企業等と学校を結びつける仕組みづくりに取り組んだ。当センターは、当該事業の推進本部及び東青地区協議会事務局として、協力企業等の発掘、登録、仲介、斡旋業務等を行った。

平成25年度から、県教育委員会3つの施策の柱の一つとして「キャリア教育の推進による人財の育成」を掲げている。そのキャリア教育の取組の一つとして、平成26年度は、「教育支援プラットフォーム」の仕組みを取り入れた重点事業「あおもりで『生きる・働く』を学ぶキャリア教育実践

事業」を実施しており、学校教育課、生涯学習課、教育事務所、当センターが連携しながら、各種取組を行っているところである。

当センターにおいては、役割分担として、

- ①教育CSRセミナーの開催
- ②ポータルサイトの開設・運営
- ③企業等の登録データベースの運用

等を担っている。

9月には、教育CSRセミナーを開催し、福井県の清川メッキ工業株式会社専務取締役清川卓二氏を講師に「企業にとっての“キャリア教育”～教育CSRによる企業メリット～」の演題で講演をいただき、企業等を中心にキャリア教育の普及啓発に努めた。

2 テーマ設定理由

平成24年度から、当センターでは、協力企業等の発掘、登録、仲介、斡旋業務等を行った。

登録企業は平成27年1月4日現在で849社の企業等に賛同していただいた。

この取組を実施して、企業等からは、「学校の対応が変わってきた」「子どもたちの指導がよくなってきている」と言われる反面、「学校からの職場体験等の依頼日が重なる。調整するところはないのか」「企業に子どもを預けるのなら、事前打ち合わせが欲しい」

「職場体験等をするのであれば、学校でマナー等を指導して欲しい」

「同じ市内の学校なのに、依頼等の仕方がばらばらである。統一した形にならないのか」等の要望も挙げられていることから、企業等に係る負担は大きいものと推察される。

現在、教育支援プラットフォームへの仲介、斡旋業務等を見ると、全県で56件の仲介依頼のうち17件が青森市内の中学校・高等学校である。その中でも、職場体験等に係るものが11件である。これは、他市町村と比較しても非常に多い状況である(表1, 2参照)。

このことから、青森市内の中学校・高等学校、及びそれらを受け入れた企業等を対象に職場体験等の現状を調査することとし、学校と企業等について、双方の観点からの分析を行い、学校と企業等のつながりがより一層深まることを期待し、テーマを設定した。

教育支援プラットフォームへの仲介依頼状況

平成 26 年 12 月 1 日現在

1 学校からの仲介依頼数(表 1)

区分	県内 全体 (校)	青森市内の 学校数(校) ()は昨年度	青森市内の学 校の割合
小学校	19	2 (5)	10.5%
中学校	27	14 (11)	51.9%
高等学校	9	3 (8)	33.3%
その他	1	0 (2)	0.0%
合計	56	19 (26)	33.9%

※その他は専門学校

2 仲介依頼内容数(表 2)

区分	県内 全体 (校)	青森市内の 学校数(校) ()は昨年度	青森市内の学 校の割合
出前授業	32	7 (12)	21.9%
職場見学	7	1 (2)	14.3%
職場体験等	17	11 (12)	64.7%
その他	0	0 (0)	0.0%
合計	56	19 (26)	33.9%

青森市内の校種別仲介依頼内容

：出前授業・・・小2回，中4回，高1回

：職場見学・・・高1回

：職場体験等・・・中10回，高1回

II 調査方法

アンケートによる調査

1 学校編

(1) 青森市内の中学校・高等学校

青森市内の中学校 22 校，高等学校 12 校

(2) 回収率

100%

(3) サンプル数(実施校)

青森市内の中学校 19 校，全日制の高等学校 12 校

※但し，高等学校においては，市内 12 校のうち 11 校が実施し，11 校がサンプルとなる。そのうち，1 校が複数の学科の実施によりその学科の主旨や実施日が異なるため，12 校として処理する。

2 企業編

(1) 青森県教育支援プラットフォーム「我が社は学校教育サポーター」登録企業(注1)のうち，職場体験等を実施したことのある企業等 60 社を抽出した。

(2) 回収率

86.7% (52 社/60 社)

(3) サンプル数

52 社

※但し，職場体験等を今年度実施していない企業等が 3 社あることから，企業等編の問 1 については 49 社となる。

(注 1)

青森県教育支援プラットフォーム「我が社は学校教育サポーター」とは、下記の条件を満たす企業等で、登録票を県教育委員会へ提出し、登録された企業等のこと。

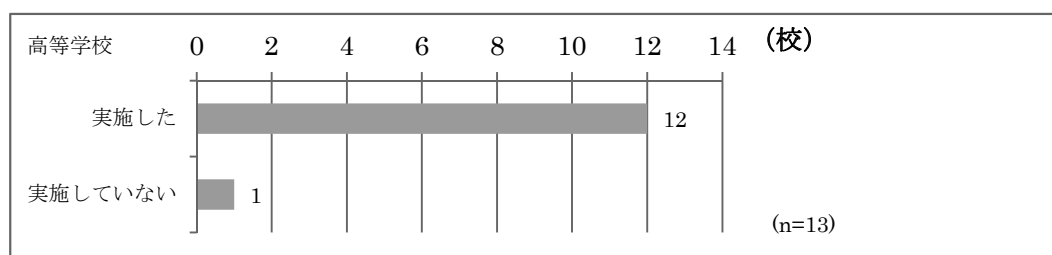
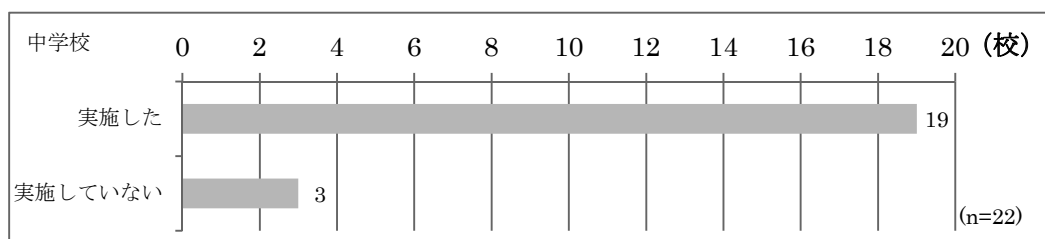
(1) 学校や地域と連携して，職業に関する知識，技術，技能及び経験を活かし，子どもたちのキャリア教育・学習活動をサポートする意識のある企業等（個人事業者を含む。）

(2) 自らの活動を通して得た知識，技術，技能及び経験を活かし，子どもたちのキャリア教育・学習活動をサポートする意思のある NPO・団体等

Ⅲ アンケートによる調査結果

1 学校編

問1 職場体験等の実施の有無



※高等学校について、調査依頼は市内12校に行ったが、そのうち1校は学科毎の提出となったため、13校として集計している。

調査した中学校22校、高等学校12校のうち、中学校で86%、高等学校で92%の学校が職場体験等を実施している。

問2 職場体験の実施日及び実施校の計(中学校19校、高等学校12校)

実施日 月/日	4	5	6	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
校種	15	13	14	2	7	8	9	10	11	14	15	16	23	24	25	28	29	30
中学校	1	1	0	1	1	4	2	2	0	1	2	1	1	1	1	0	0	0
高等学校	0	0	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	1	1	2	1
計	1	1	1	1	1	4	3	3	1	1	2	1	1	1	2	1	2	1

実施日 月/日	8	9	9	9	9	9	9	9	9	9	11	11	11	11	11	11	12	12
	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
校種	28	1	2	3	4	5	9	10	11	12	7	12	13	26	27	28	5	24
中学校	1	1	6	4	3	1	1	1	0	0	1	1	1	1	1	2	0	0
高等学校	0	0	2	2	2	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1
計	1	1	8	6	5	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1

※複数学年で実施しているため、合計校数は多くなっている。

※その他の回答

中学校：7/22-31の1日

高等学校：7/25-31の1日，7/28-8/12の3日，7/30-8/5の2～3日，8/18-29の12日間

7/22-10/3の3日，10/27-31の5日，11/13-19の5日

6月～10月の27日間，7月～9月の27日間

実施日に関する質問では，夏季休業の前後となる7月上旬と9月上旬に依頼が集中していることがわかる。特に，中学校では，夏季休業中を利用して，事前・事後指導や企業との打合せを実施したいという回答が多かったが，それを意識した日程設定となっている。

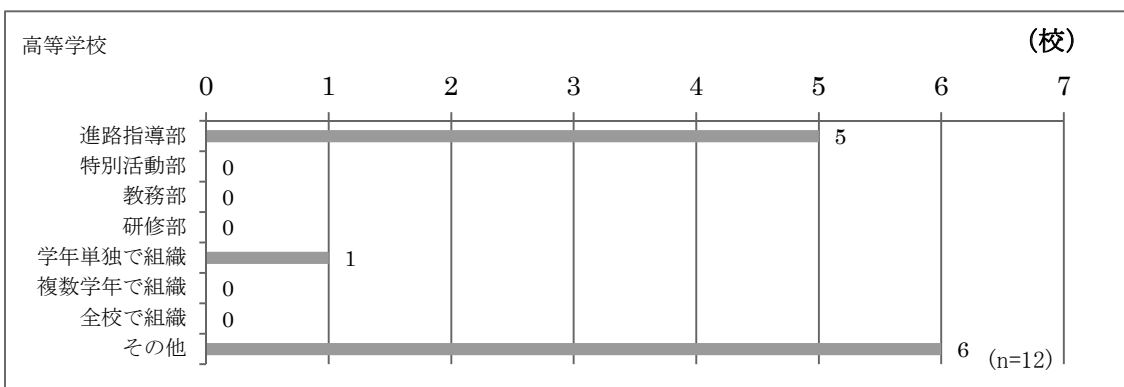
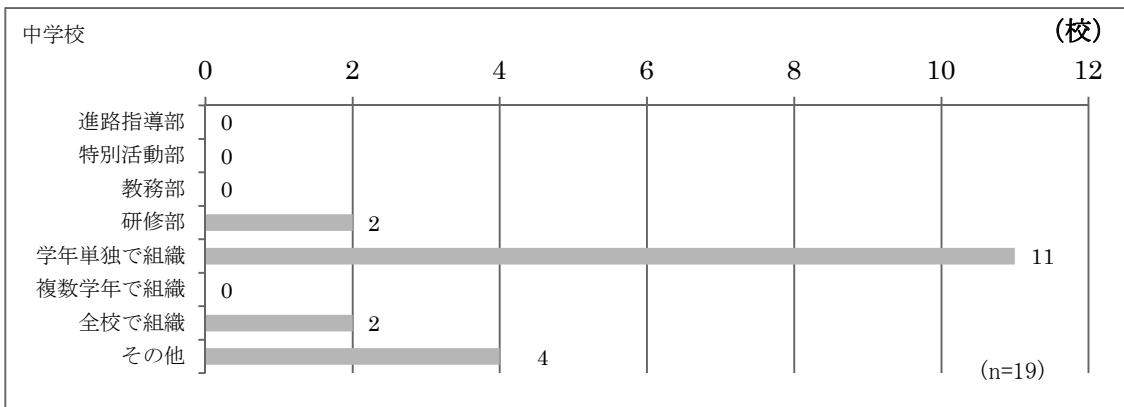
また，高等学校では，夏季休業の前後及び夏季休業中の実施が多くなっている。

中学校における4月や5月の実施は，職場体験を3年生の修学旅行中に実施している学校もある。

高等学校の中には，企業が指定した日に実施したという回答も見られた。

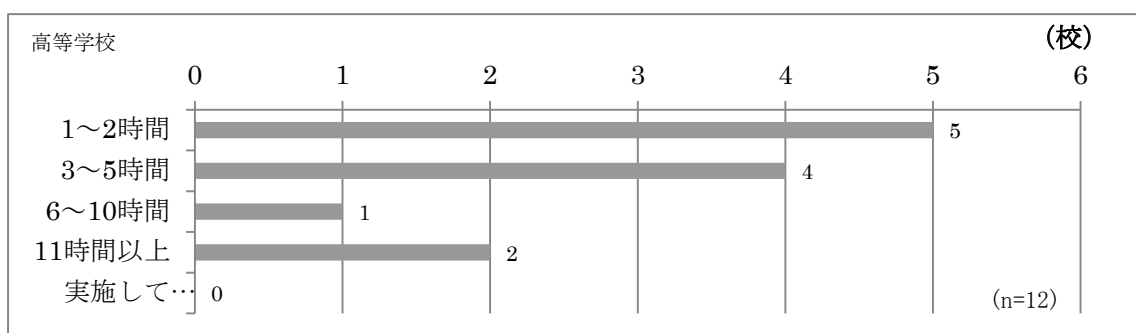
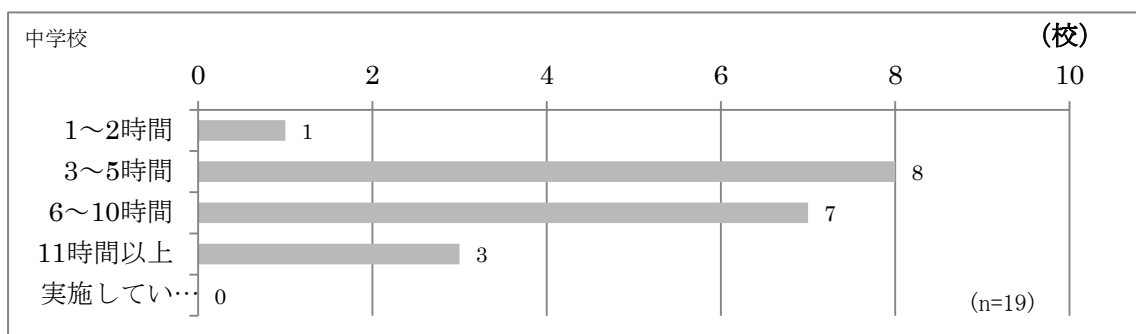
いずれにしても，7月8日～10日と9月2日～4日に集中している状況が企業等の負担感につながっていると見える。

問3 職場体験等を担当する学校内の組織



職場体験等を担当する校内組織に関する質問において，中学校は学年単独の回答が実施19校中11校であったのに対し，高等学校では，進路指導部が担当とその他（複数の分掌での組織や学科で担当など）の回答が多かった。

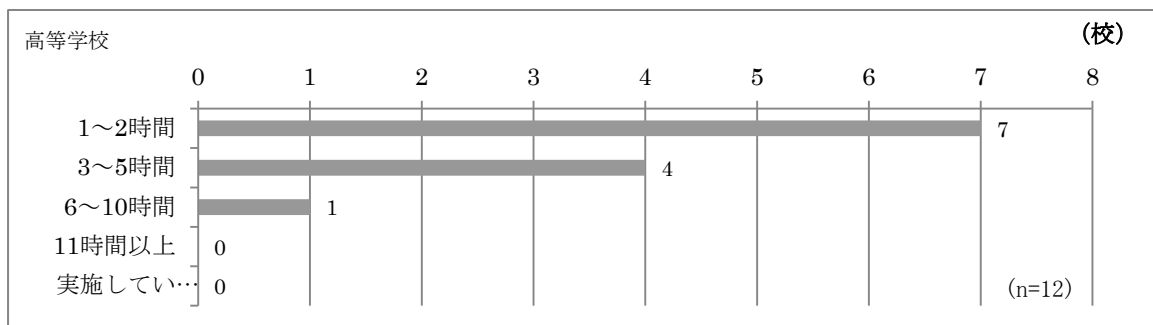
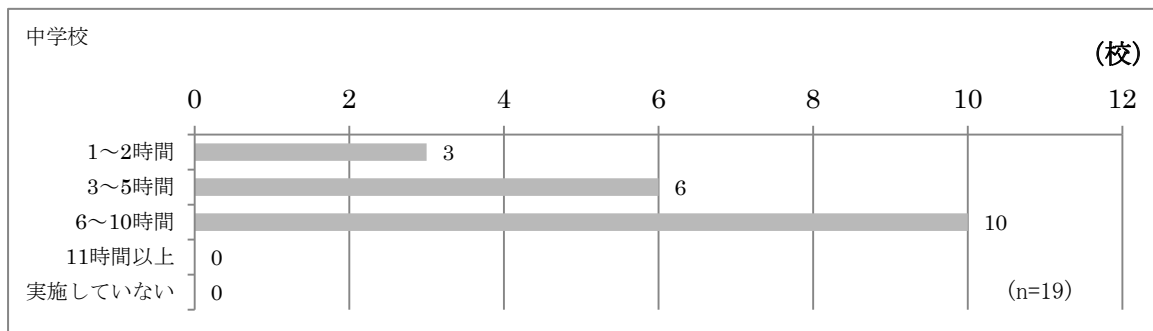
問4 職場体験等を実施する際、事前学習にかける時間



事前学習にかける時間においても中学校と高等学校では大きな違いが見られた。

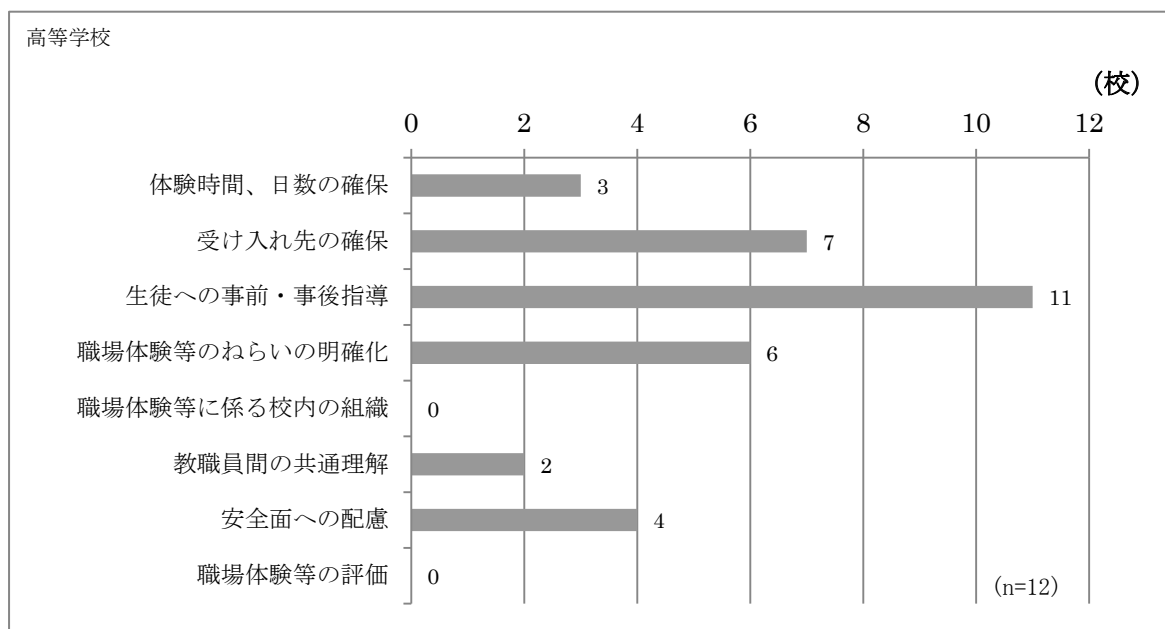
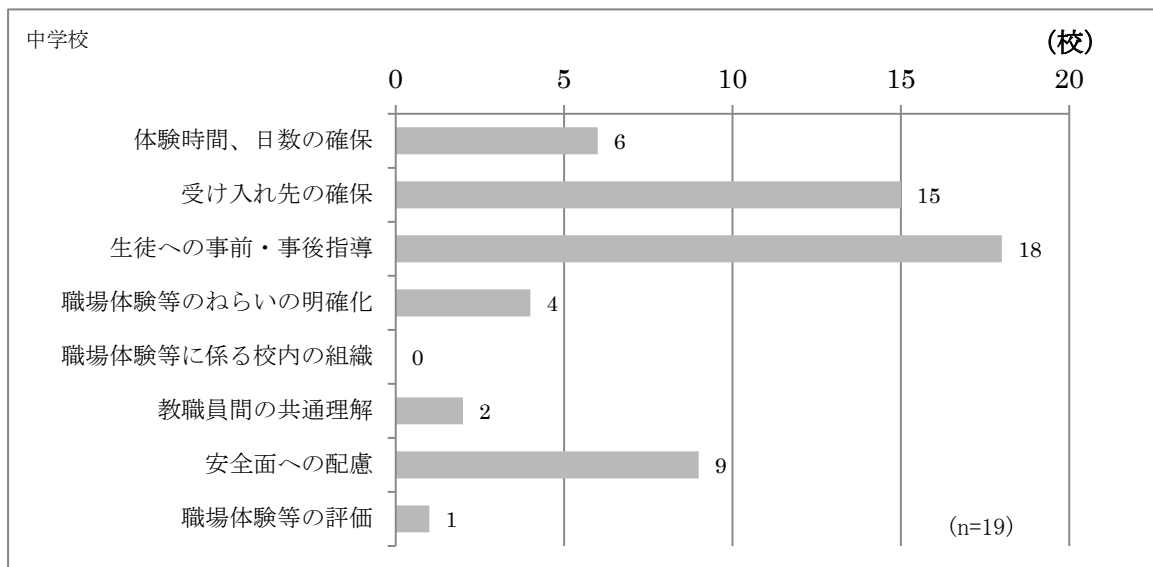
中学校では3～10時間という回答が80%近くを占めたのに対し、高等学校では1～5時間の回答が75%であった。中学校において、より多くの時間をかけて指導に当たっていることが読み取れる。

問5 職場体験等を実施した後、事後学習にかける時間



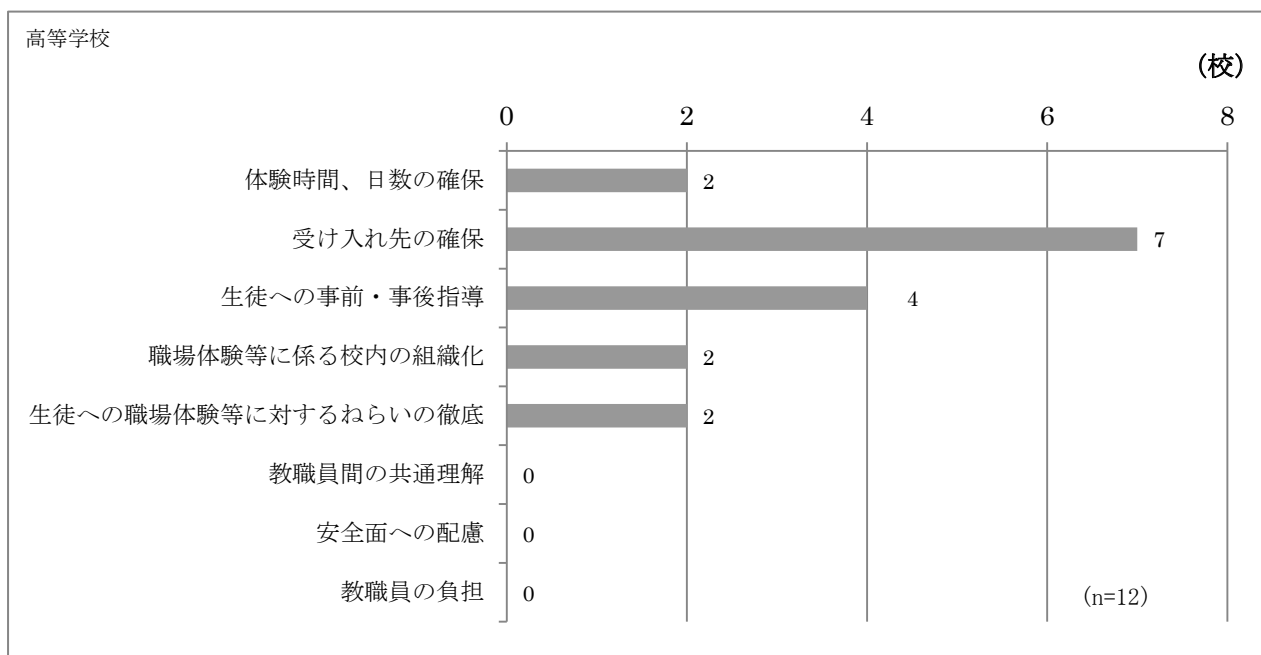
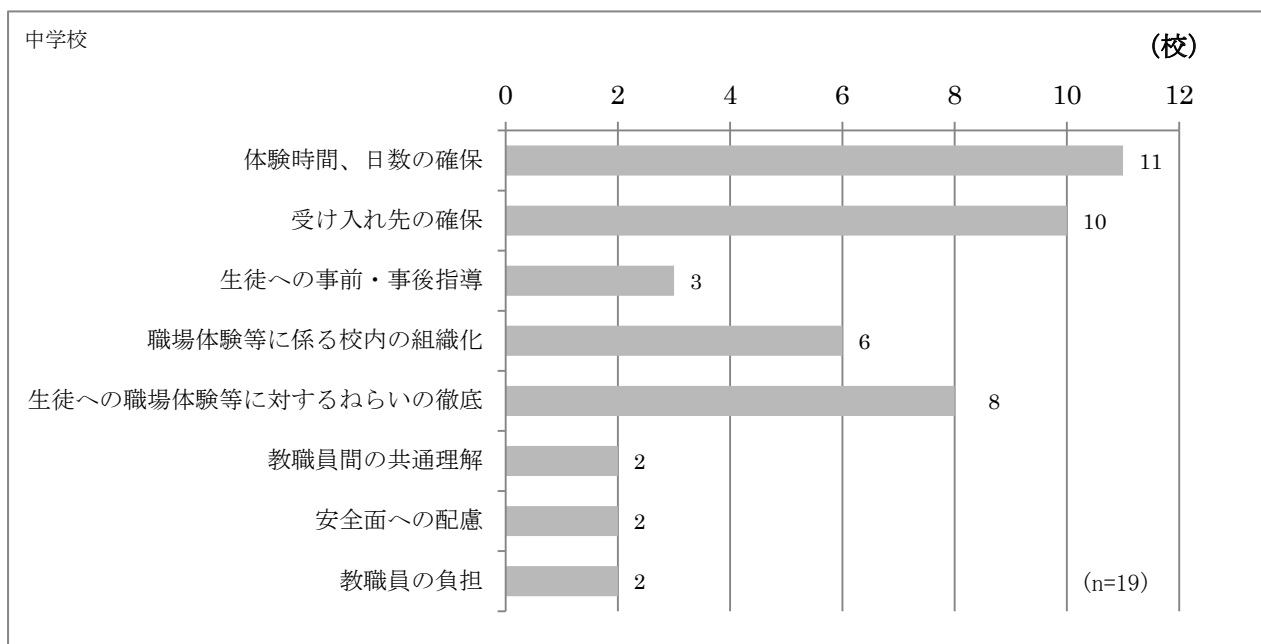
事後学習にかける時間は事前学習の場合と同様、中学校では3～10時間の回答が約84%であったのに対し、高等学校では1～5時間が約92%であった。

問6 職場体験等を実施する際に、特に学校が重視している点(3つ以内)



実施するにあたり、重視している点については、中学校・高等学校ともに、生徒への事前・事後指導と受け入れ先の確保が多い回答であった。

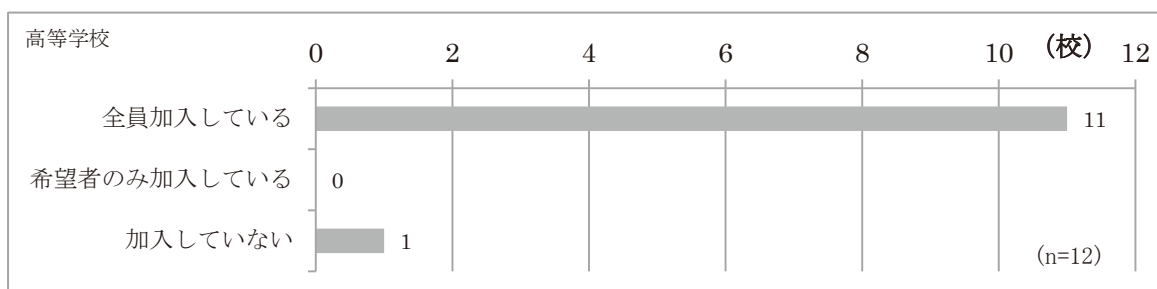
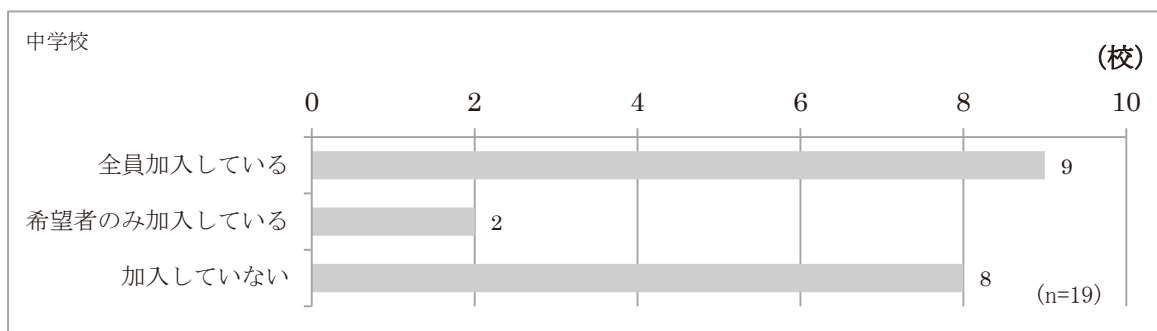
問7 職場体験等を実施しての課題(3つ以内)



課題としては、中学校では体験時間・日数の確保と回答した学校が最も多く、受け入れ先の確保を挙げている学校が次に多かった。一方、高等学校では受け入れ先の確保と回答した学校が最も多く、次いで、生徒への事前・事後指導との回答が続いている。

両校種とも、受け入れ先の確保で苦勞していることが伺える結果となった。

問8 賠償責任保険への加入の有無

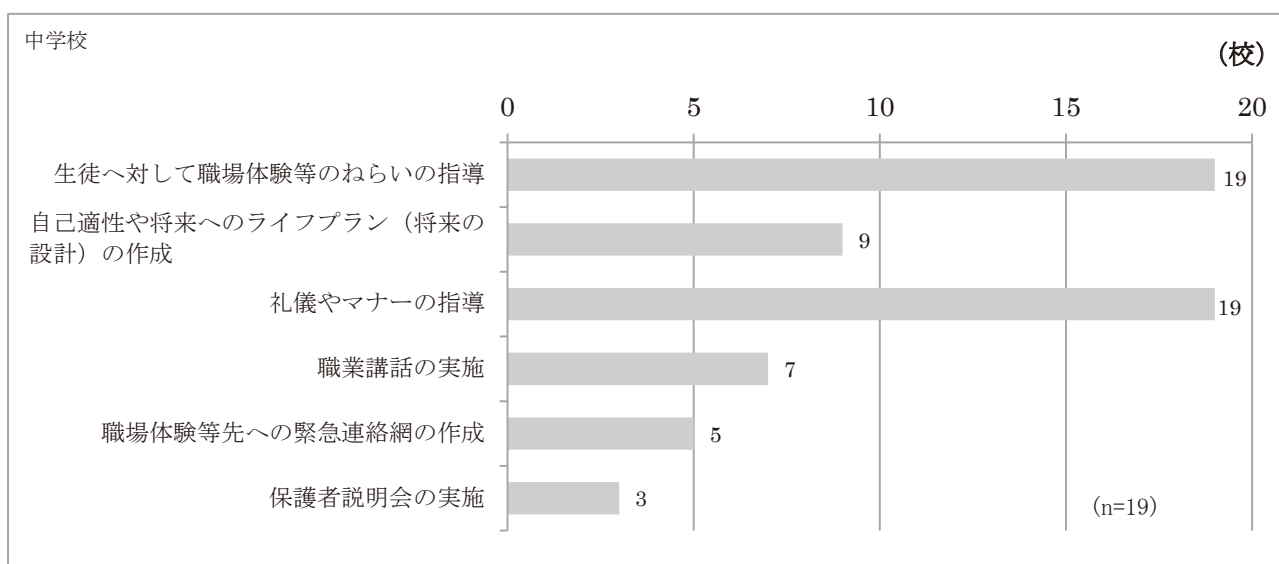


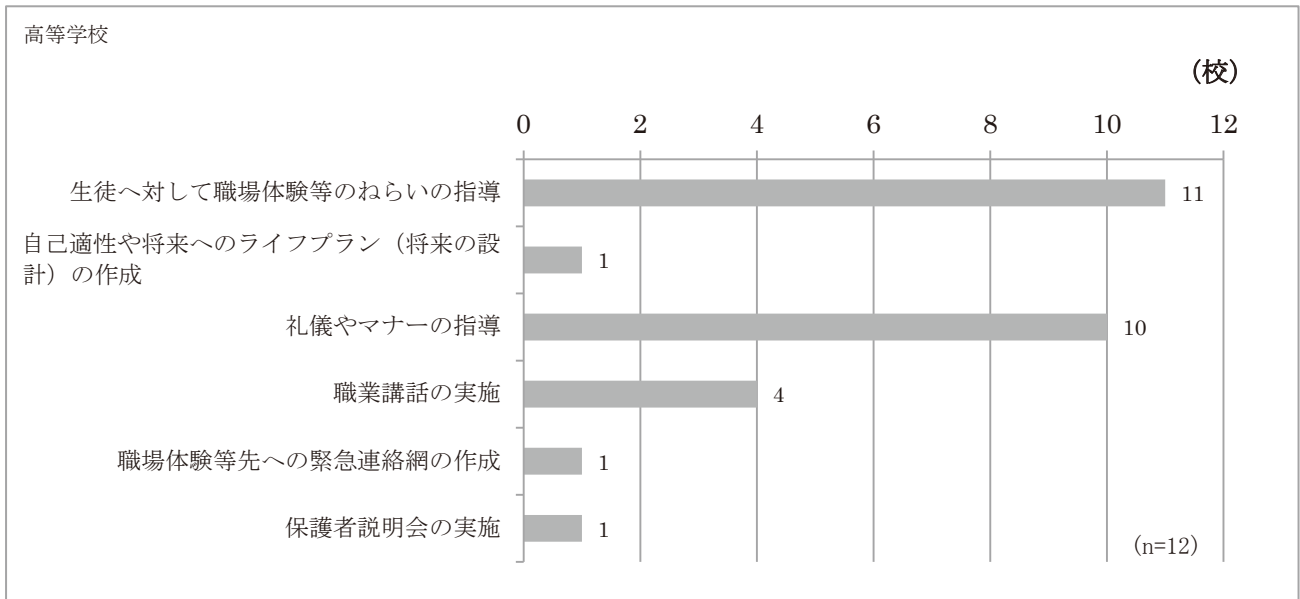
職場体験等の期間中の保険への加入状況は、校種で大きく違いが見られた。

中学校では加入・未加入が約半数ずつであるのに対し、高等学校では90%以上の学校で加入している状況である。

移動中の事故等や実施先での器物破損等に備えるためにも、賠償責任保険などの存在を広く周知していく必要があると考えられる。

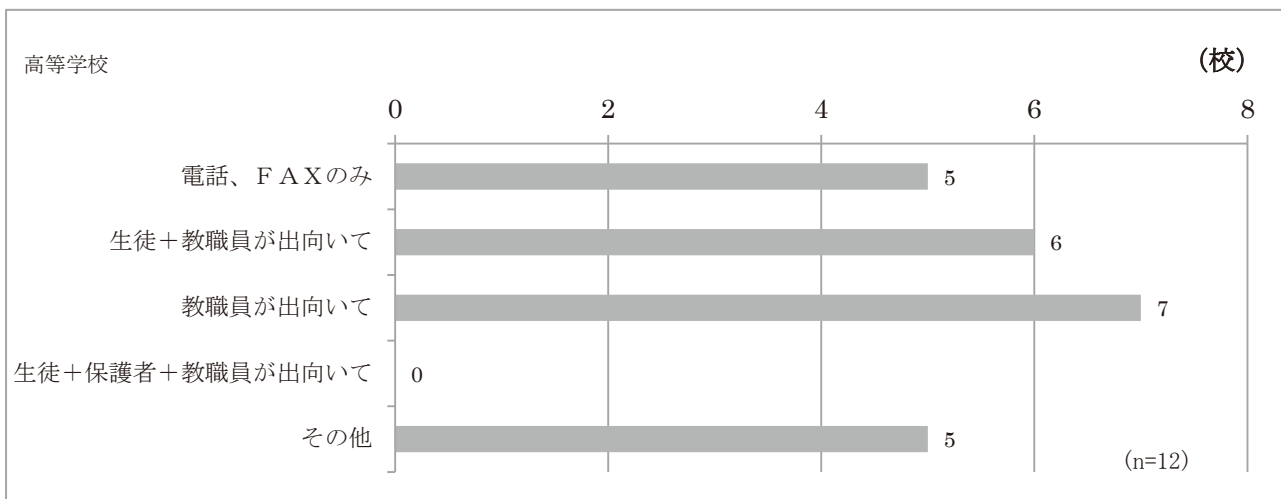
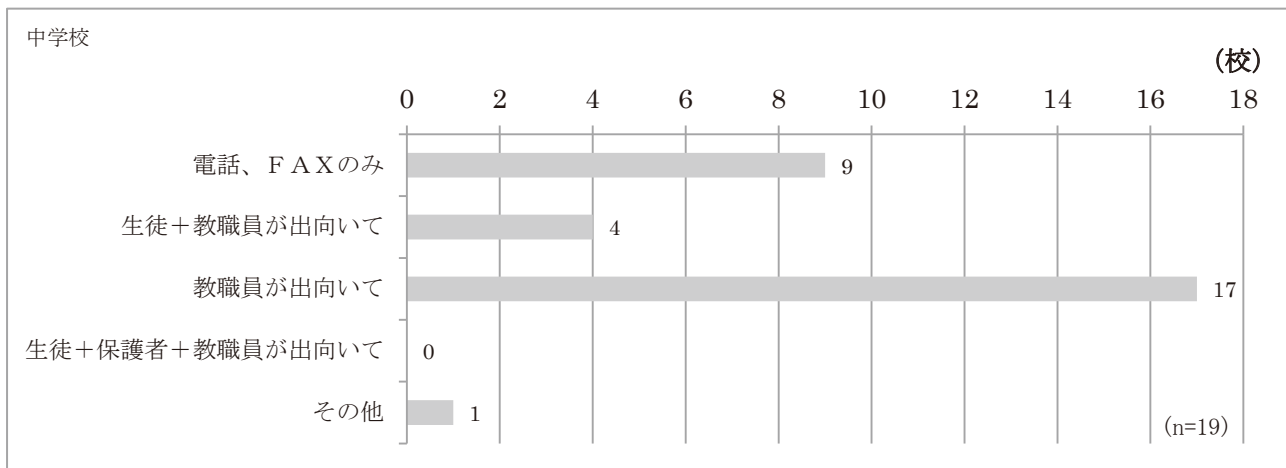
問9 職場体験等を実施する際の生徒に対しての事前の取組(複数回答)





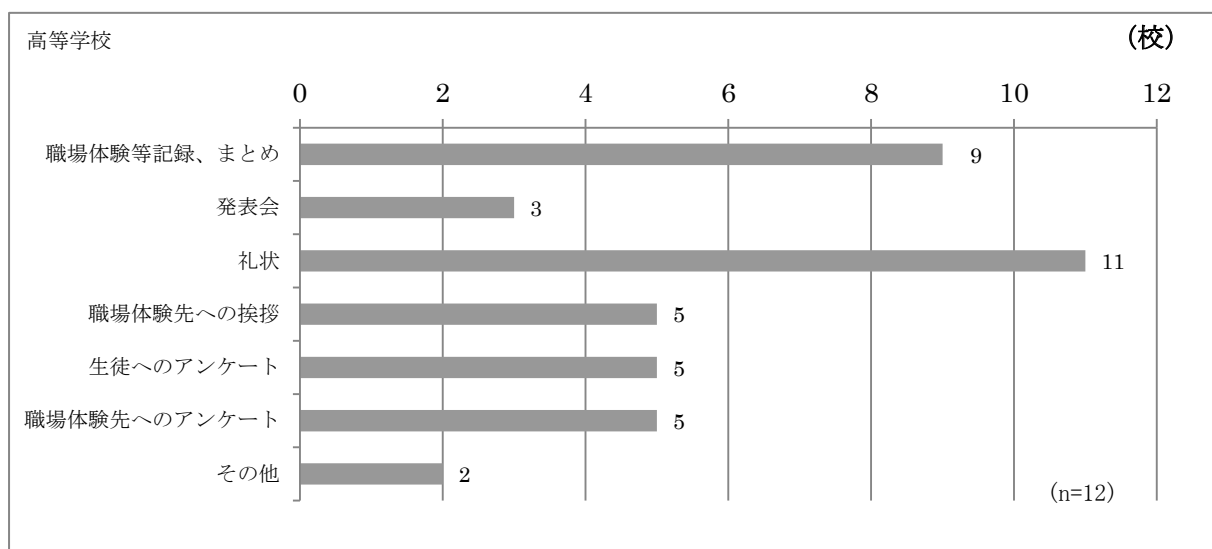
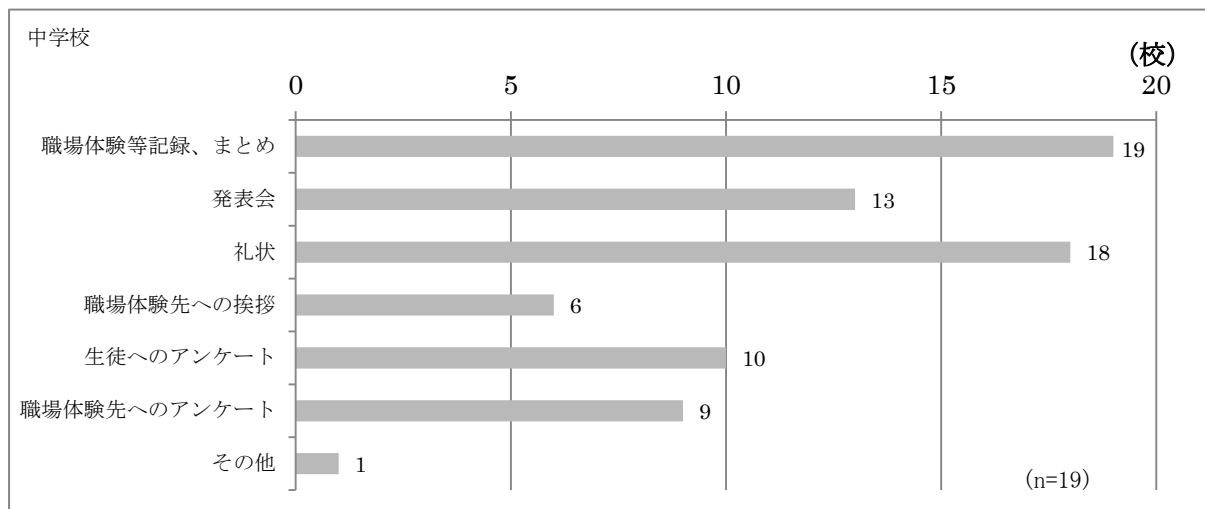
事前の取組では、中学校と高等学校ともに職業体験等のねらいの指導と礼儀やマナーの指導に重点を置くという回答が多かった。

問 10 職場体験等を実施する際の事前の挨拶や打合せの方法(複数回答)



事前の挨拶や打合せは、両校種とも教職員が出向いて行うという回答が最も多かったが、高等学校では、生徒も出向くという回答が6件あった。卒業後、就職する場合も考えられるため、指導の一環として行われていると思われる。

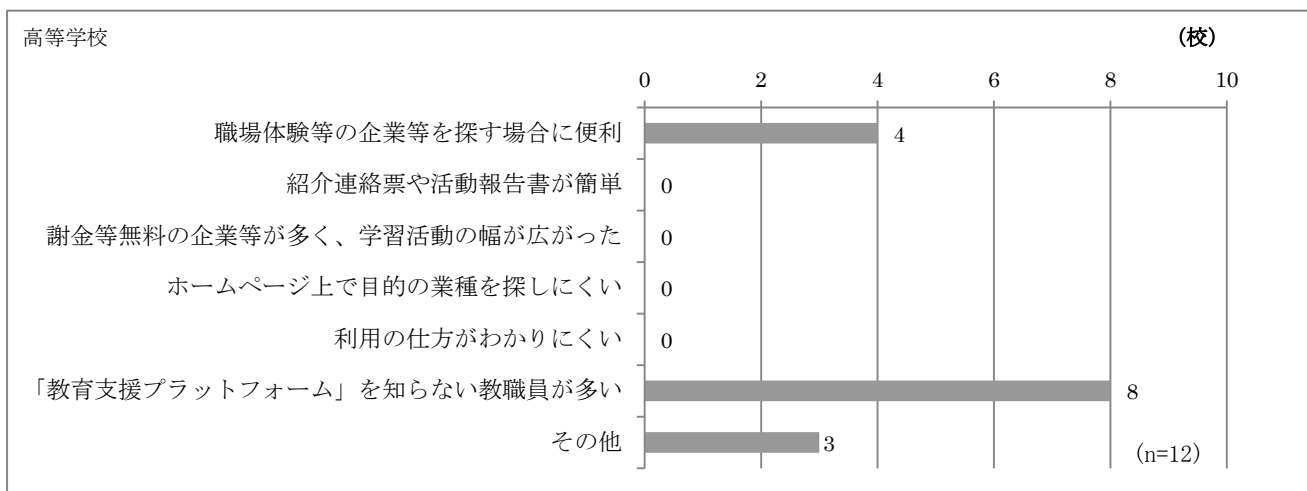
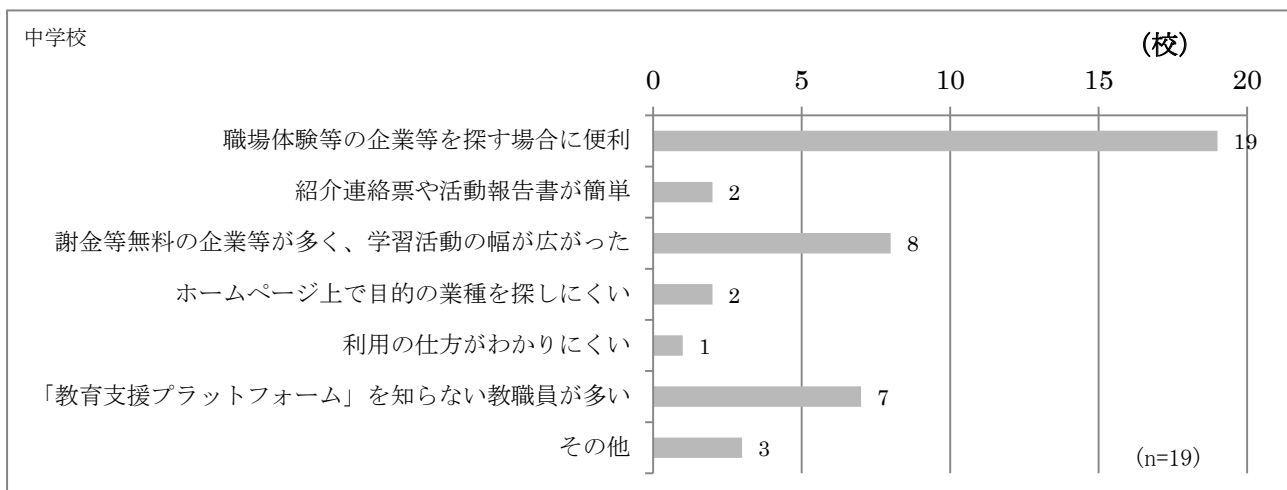
問 11 職場体験等を実施した事後の取組(複数回答)



事後の取組に関しても、中学校と高等学校では大きな差は見られなかった。記録・まとめや礼状が上位項目となっている。

また、中学校では、発表会を実施しているところが多いのが特徴である。

問 12 青森県教育支援プラットフォームについて(複数回答)



青森県教育支援プラットフォームについての質問では、「中学校で企業等を探すのに便利である」とか、「謝金等無料で学習活動の幅が広がった」という項目で多数の回答が見られた。うまくこの制度を活用して、職場体験等を行っている様子が伺える。

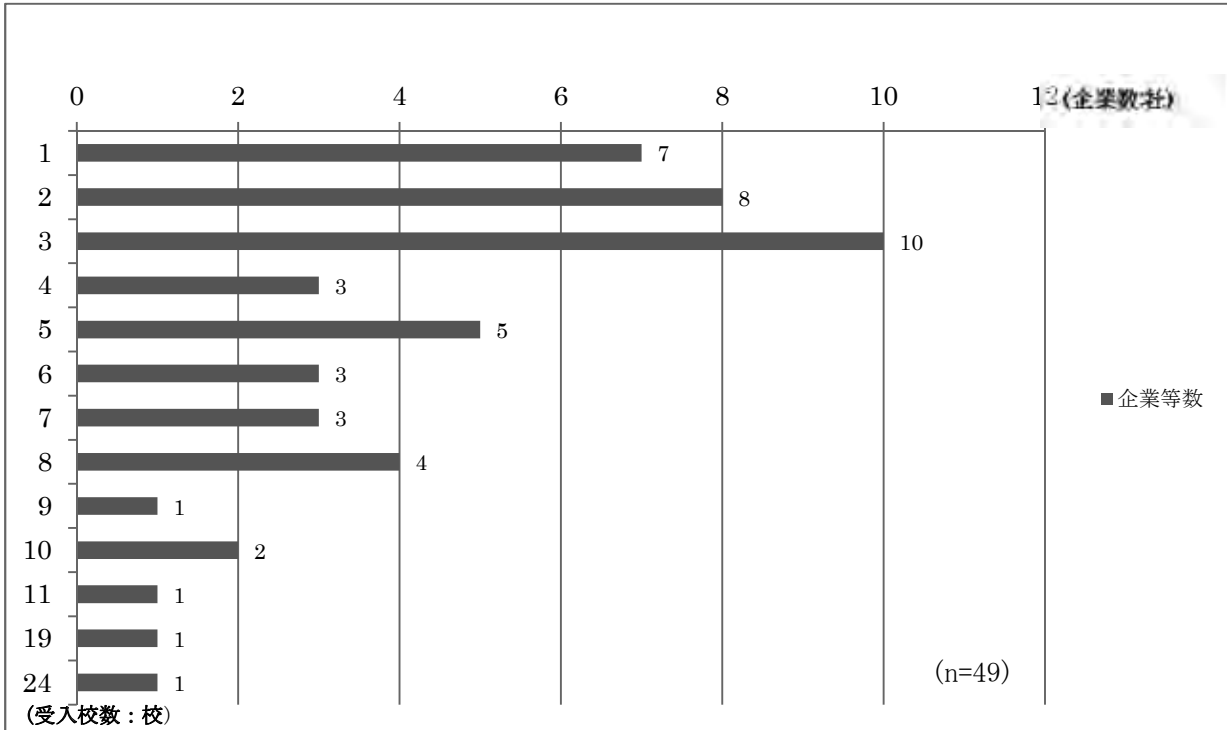
それに対して、高等学校では、「教育支援プラットフォームを知らない」という回答が最も多く、あまり活用されていないと思われる。

教育支援プラットフォームを積極的に周知することにより、職場体験等が活発に、効果的に行われるようにしていく必要がある。

2 企業等編

問1 今年度の受入状況について

問1(1)-1 今年度の企業等1社あたりの中学校・高等学校合わせた受入学校数



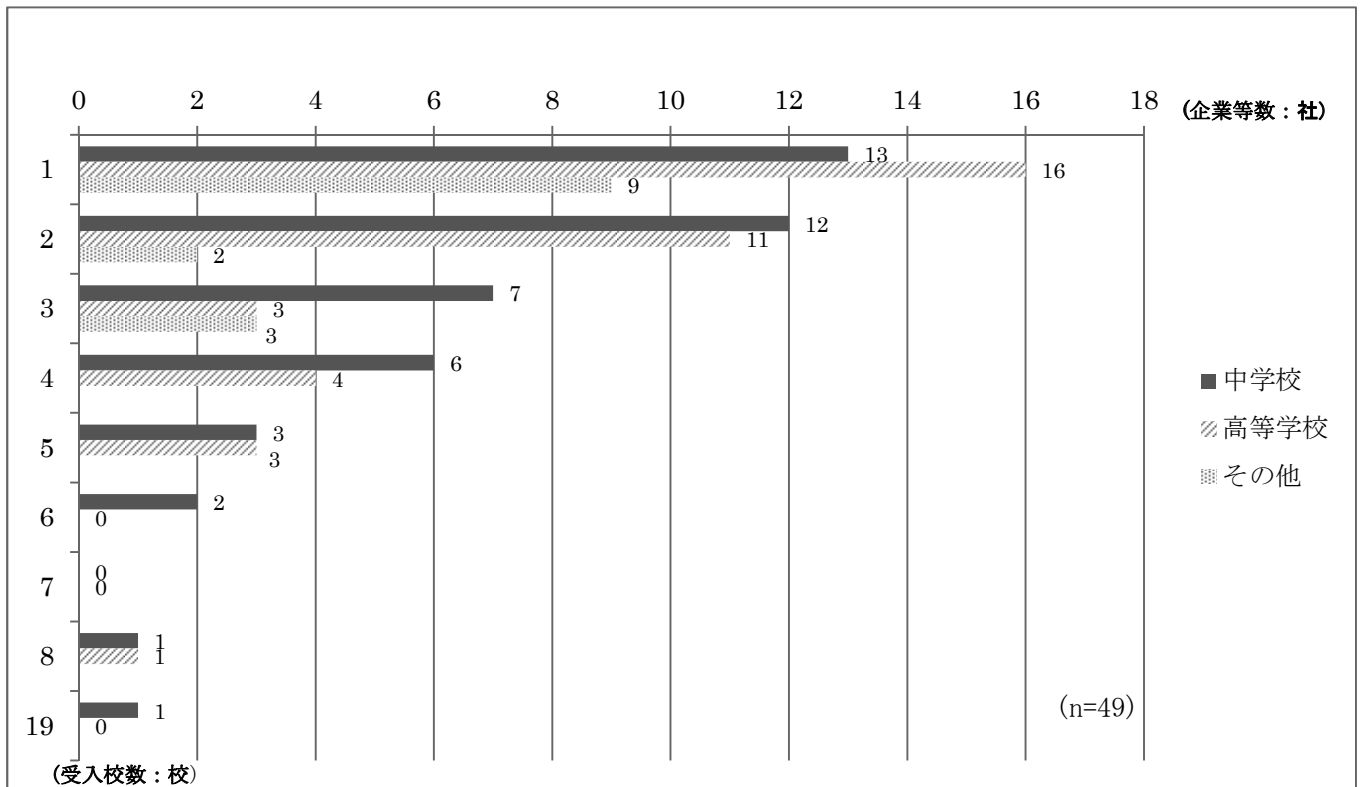
今年度、企業等1社が職場体験等を受け入れた学校数は1～3校が約50%である。また、10校以上受け入れている企業等も数社ある。

問1(1)-2 今年度の企業等の校種別（中学校，高等学校，その他）受入数(単位：社)

校数	中学校	高等学校	その他	計
0	4	11		15
1	13	16	9	38
2	12	11	2	25
3	7	3	3	13
4	6	4		10
5	3	3		6
6	2	0		2
7	0	0		0
8	1	1		2
19	1	0		1
計	49	49	14	112

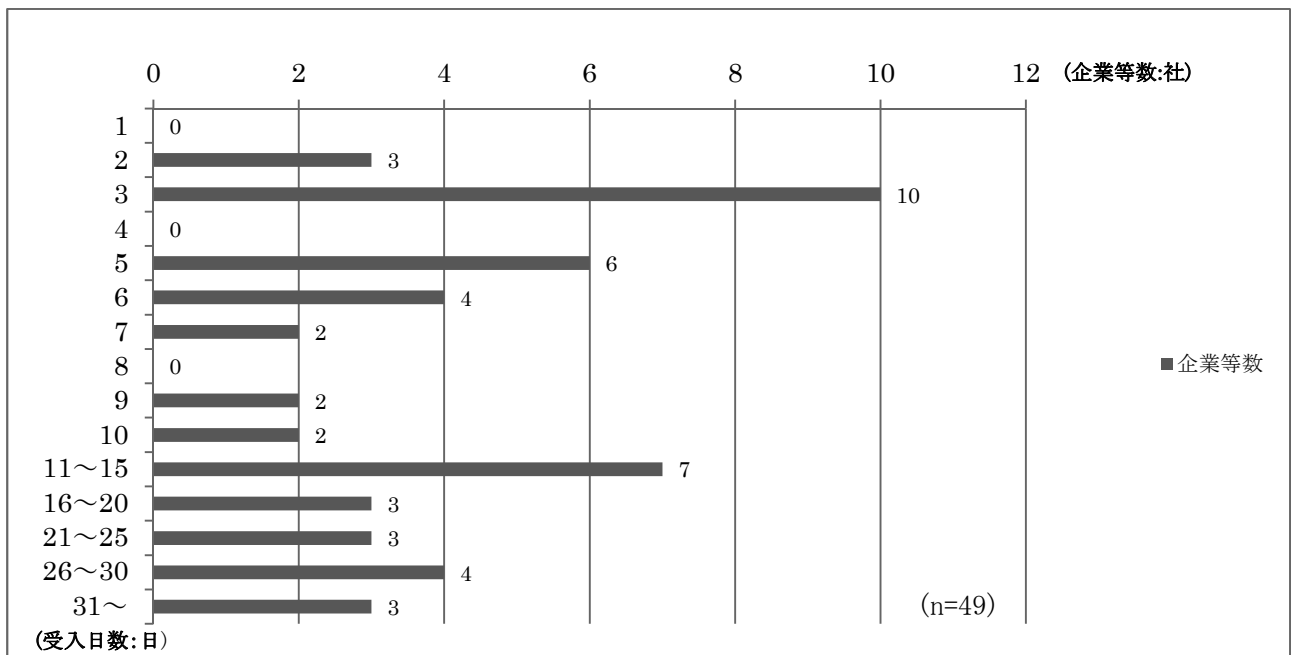
※その他としての校種は、大学10、短期大学3、専門学校2、小学校6、特別支援学校1である。(1～3校のみのため、他には0の表示を省略した)

問1(1)－2の表のグラフ化



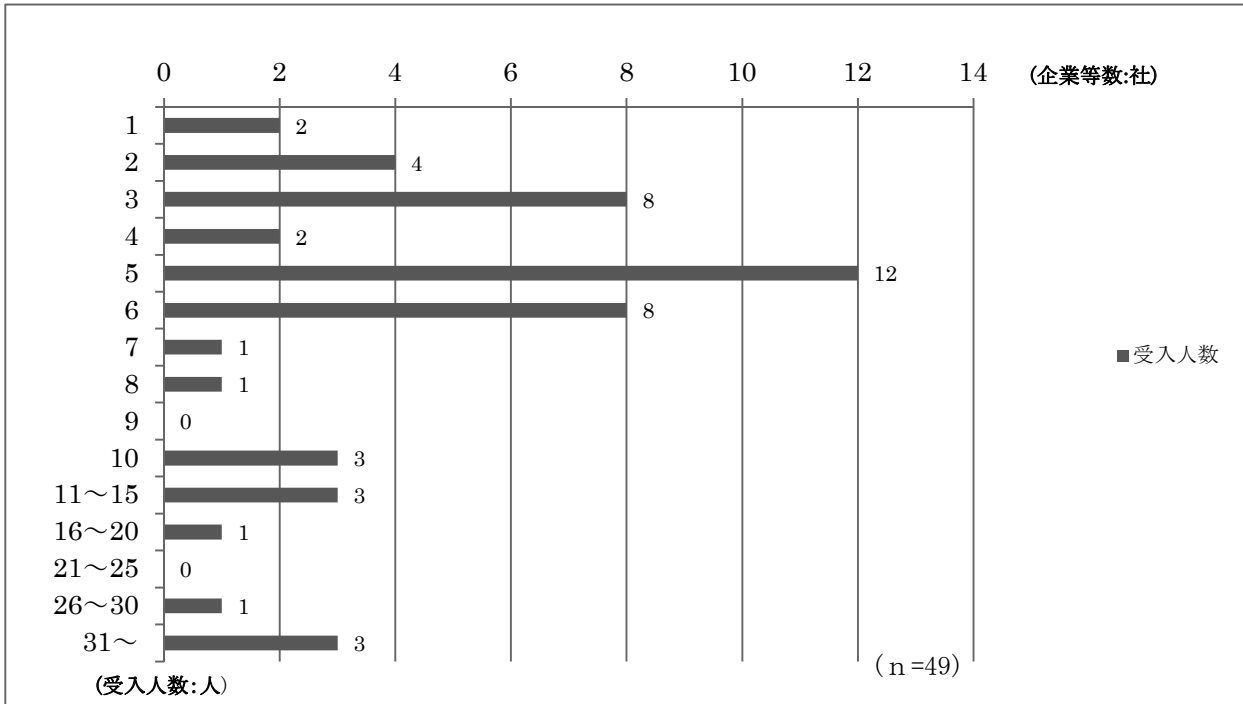
問1(1)－1を中学校、高等学校、その他にして比較すると、企業等は中学校・高等学校ともに1～2校が多い。

問1(2) 今年度の中学校・高等学校合わせた受入延べ日数



企業等が職場体験等の学校を受け入れている延べ日数で1番多いのは3日である。職場体験等の学校からの依頼を10日以上受け入れている企業等が約45%ある。

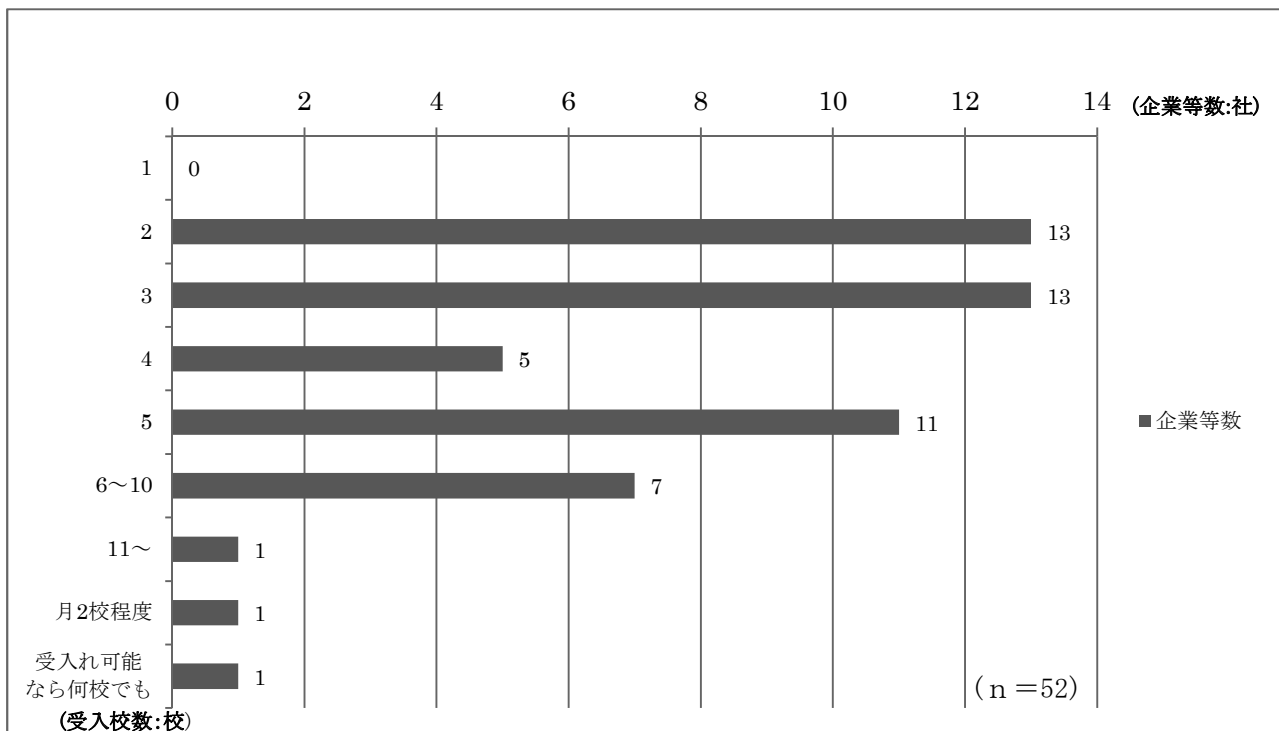
問1(3) 今年度の中学校・高等学校合わせた1日の受入れた最大人数



企業等が職場体験等を1日に受け入れた最大人数は5人が最も多い。1日で31人以上受け入れた企業等は3社ある。

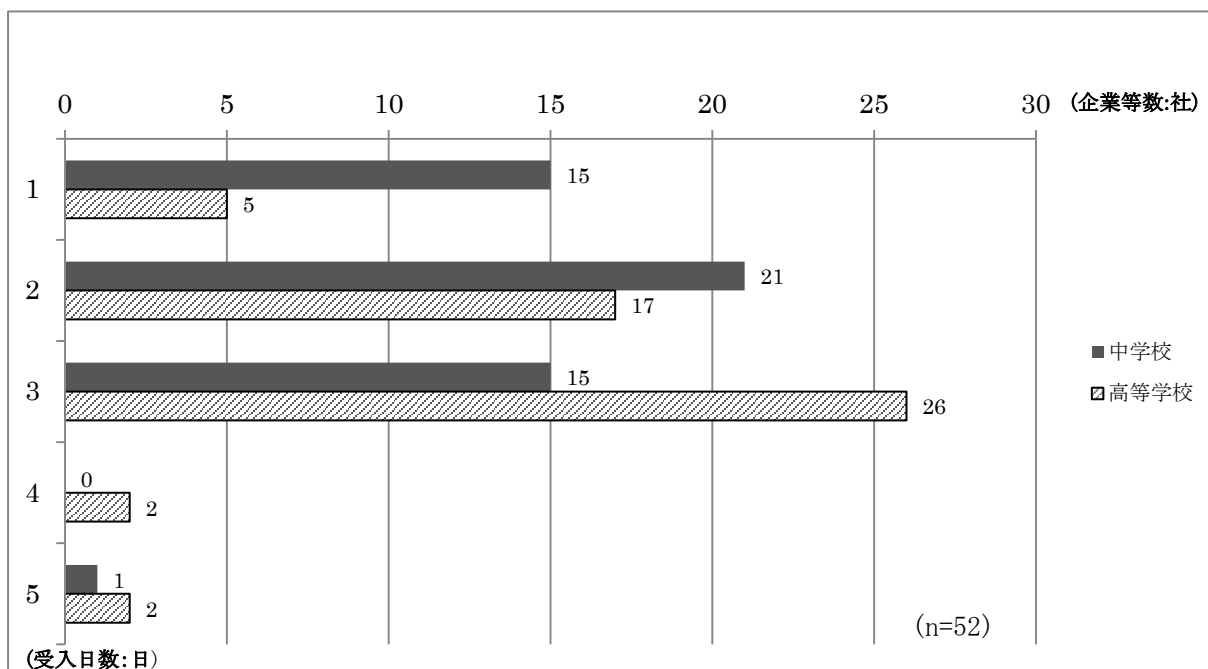
問2 次年度以降の受け入れについて

問2(1) 次年度以降、適当と思われる受入学校数



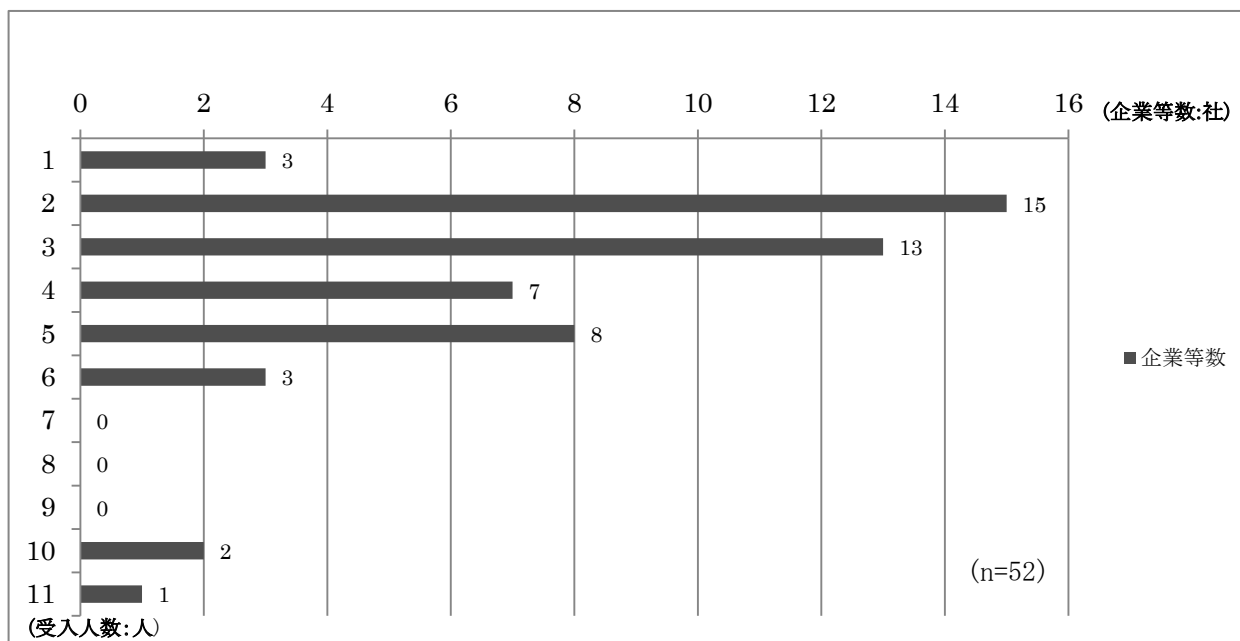
職場体験等の際、学校からの受け入れ数として2~3校が適当と考えている企業等が最も多い。中には、時期と人数の条件が合えば、5校以上の受け入れも可能と考えている企業等もある。

問2(2) 企業等から見た1回あたりの中学校・高等学校別受入希望日数



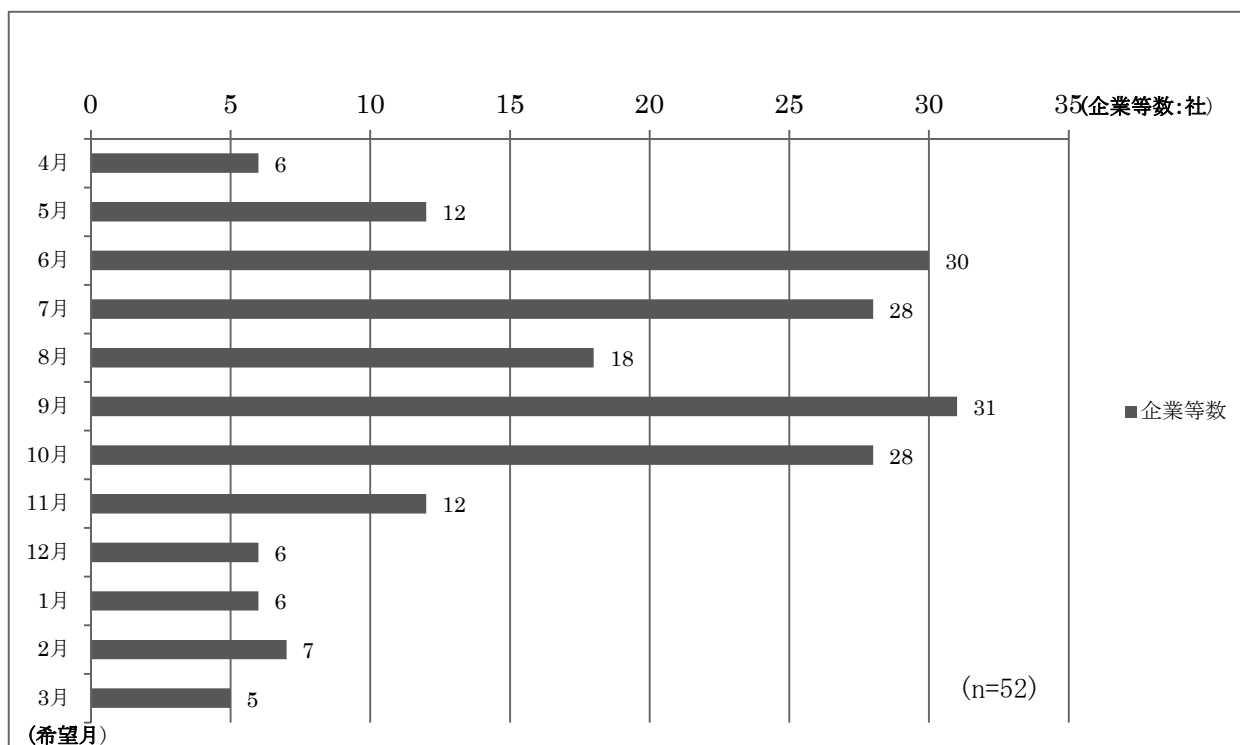
職場体験等の実施について、1回あたり中学校においては、2日を中心に、高等学校は3日を中心に受け入れたいと考えている企業等が多い。

問2(3) 企業等から見た1回あたりの受入適当人数



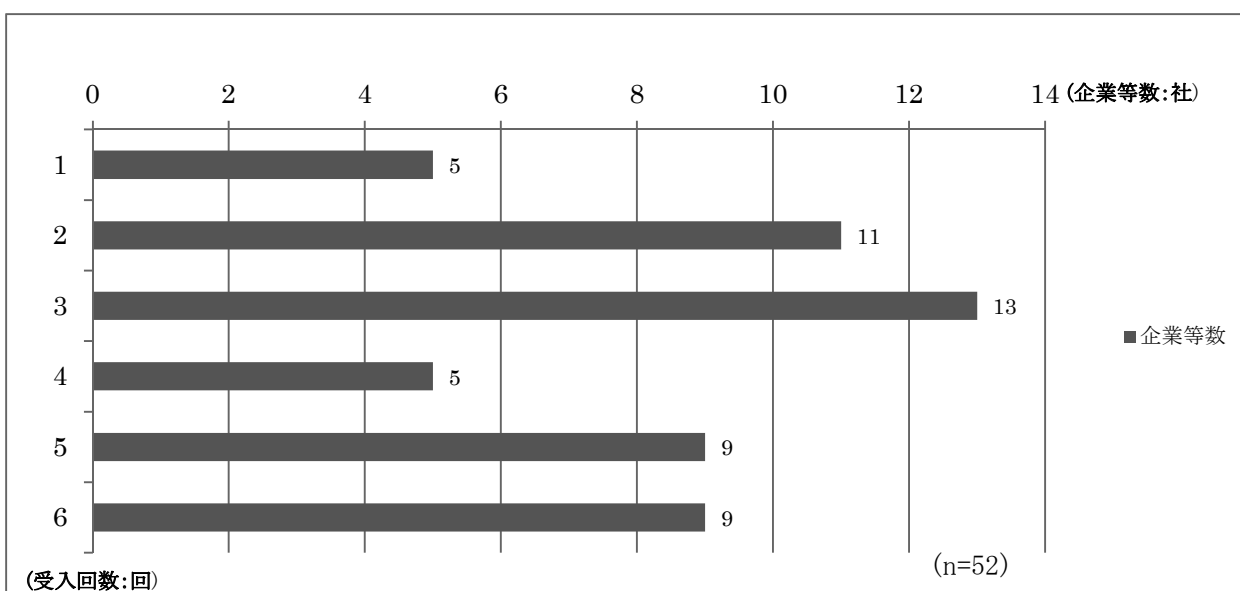
企業等では、職場体験等の1回あたりの受入人数は、2～3人が適当と考えている。

問2(4) 企業等から見た職場体験等の受入希望時期(複数回答)



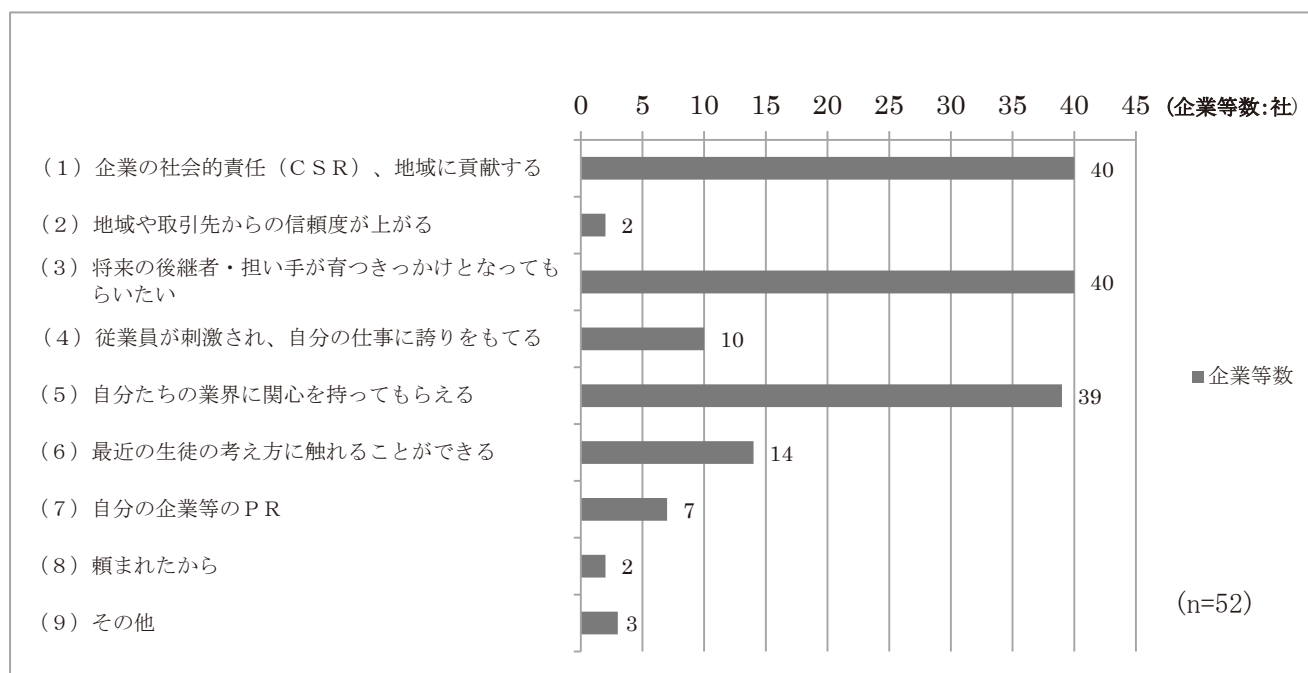
企業等が希望する職場体験等受入時期は、6、7、9、10月が多い。

問2(5) 企業等から見た年間受入回数



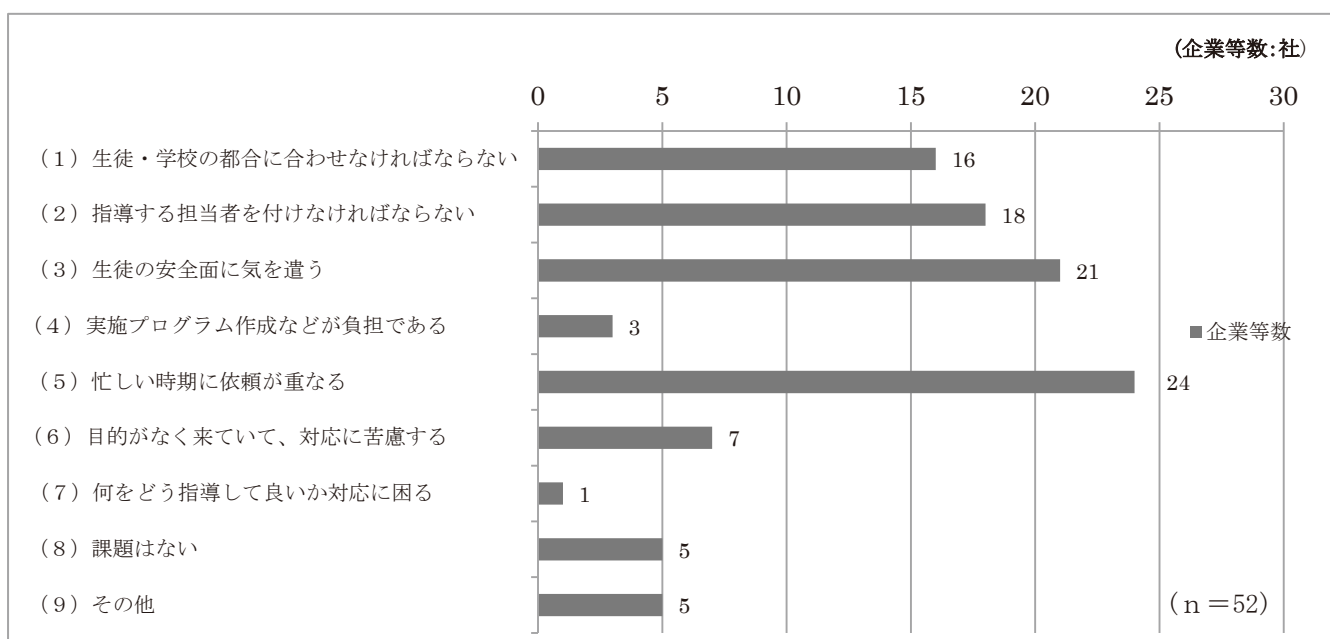
企業等が適当と考える受入回数は、2～3回と回答している。受入時期等によっては、5～6回も可能と回答している企業等は18社ある。

問3 企業等が職場体験等を実施(受入)する理由(3つ以内)



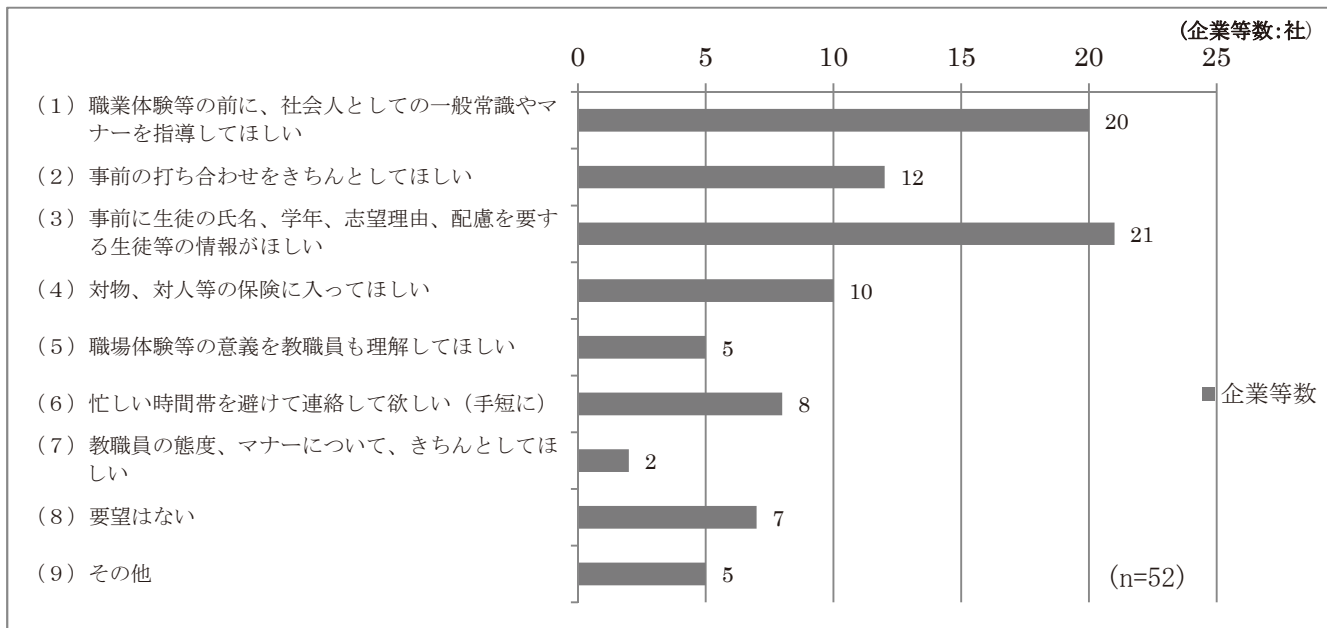
職場体験等受入の理由として、約80%の企業等が「企業の社会的責任・地域に貢献する」「将来の後継者・担い手が育つきっかけ」「自分たちの業界に感心をもって欲しい」と考え受け入れている。その他には、「将来を決める選択肢になれば、小さな企業でも楽しさを知って欲しい」などの回答があった。

問4 企業等が職場体験を実施(受入)する際の課題(3つ以内)



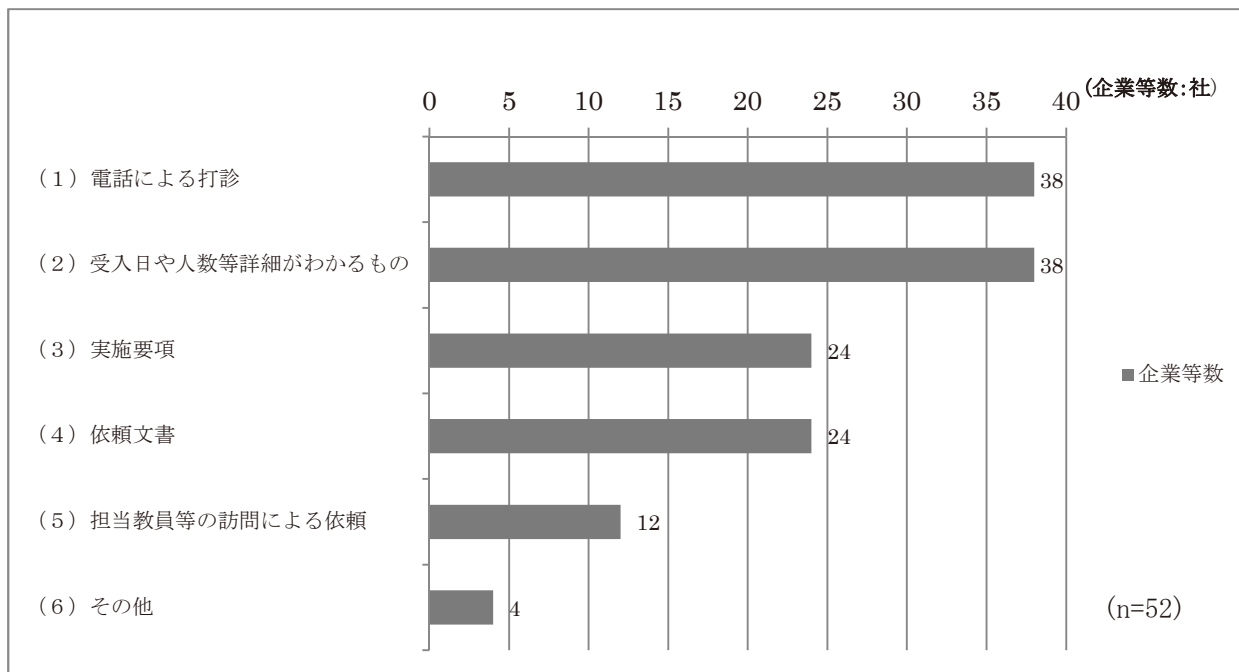
約半数の企業等は、忙しい時期に仕事が重なることが課題と考えている。企業等は、学校を支援したいと考える中、「指導する担当者を付けなければならない」「生徒の安全面に気を遣う」「生徒・学校の都合に合わせなければならない」など、受け入れをする際に学校側に気を遣っている現状がある。その他の回答には、「学校の目的や方針が明記されていない」「学校での取組に温度差がある」などがあった。

問5 職場体験等を受け入れる際の学校への要望(3つ以内)



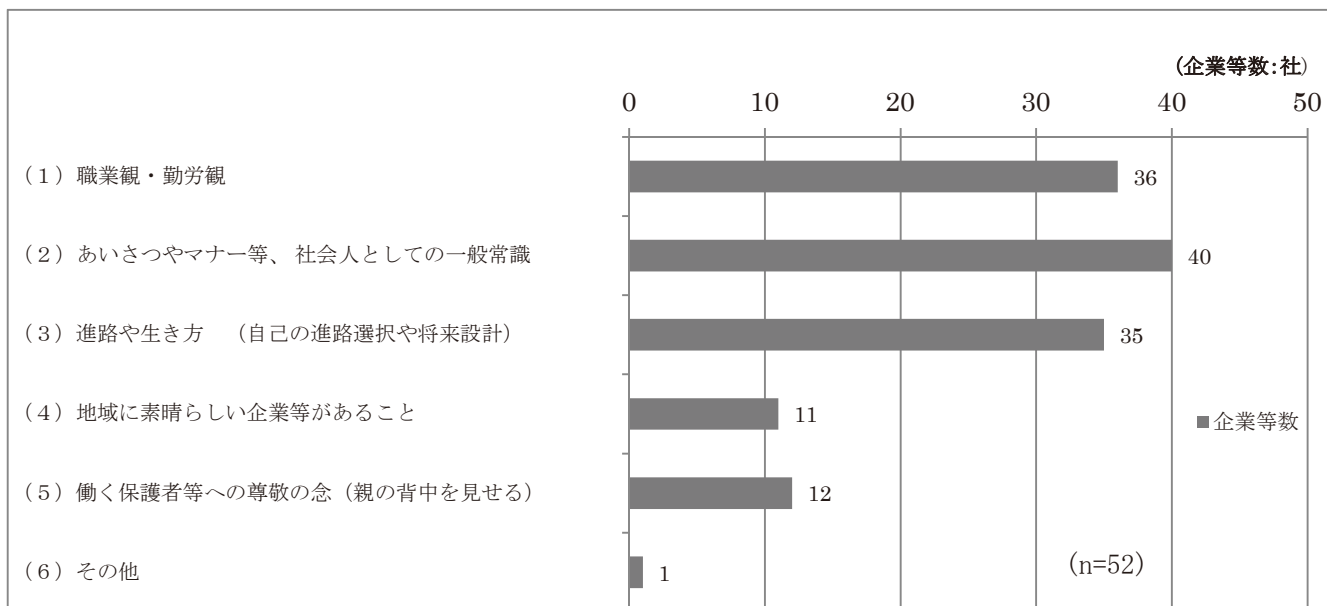
職場体験等を受け入れる際の学校への要望として、「受け入れる生徒の情報」「社会人としての一般常識・マナー」を要望している企業等が多い。その他の回答では、「体験するなら2～3時間ではなく、1日の生活ぶりを見て欲しい」「学校からの依頼日が重なり、学校で調整してほしい」などがあつた。

問6 職場体験等を依頼される際、必要だと思うもの(複数回答)



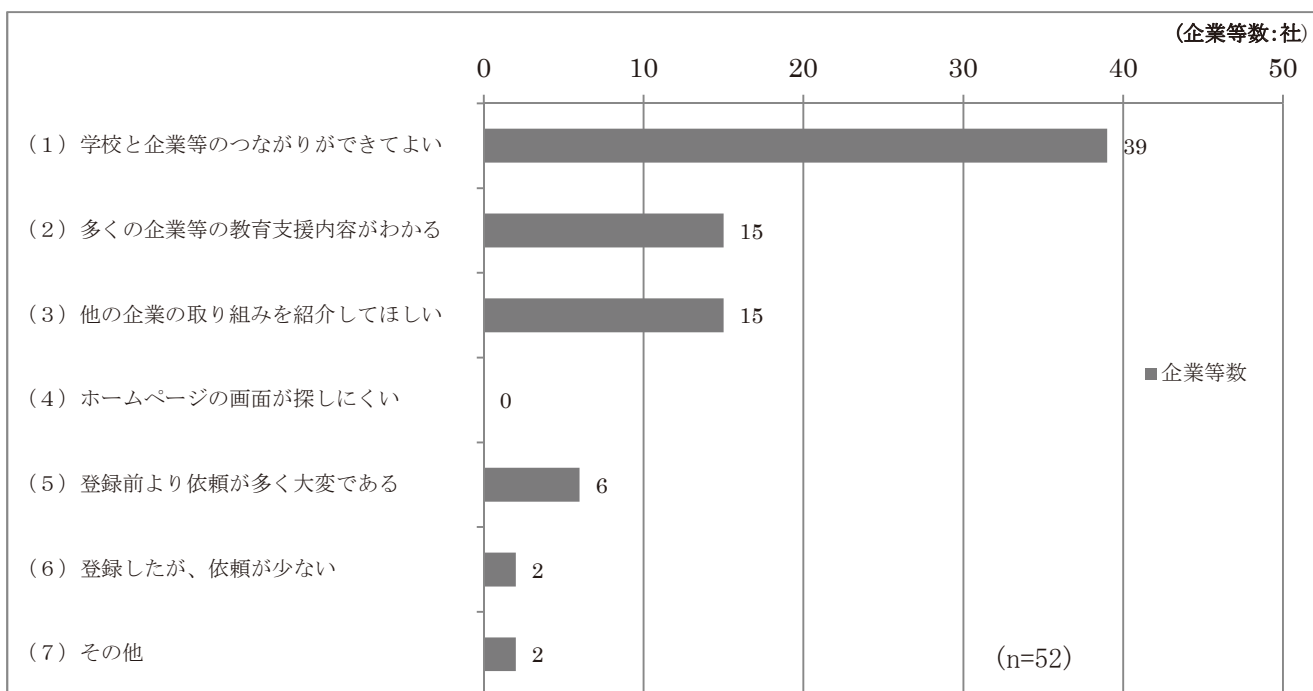
学校から職場体験等の受入の際、「電話による打診」「受入日や人数等詳細がわかるもの」が最も多かつた。その他の回答では、「依頼を受けてから連絡がなかなか来ない」「具体的な人数を教えて欲しい」などの要望があつた。

問7 職場体験で、企業等が生徒に学んで欲しいこと(複数回答)



職場体験等を通して生徒に学んで欲しいことは、「社会人としての一般常識・マナー」「職業観・勤労観」「進路や生き方」を学んで欲しいと考えている企業等が多い。

問8 青森県教育支援プラットフォーム「我が社は学校教育サポーター」について(複数回答)



学校と地域のつながりのきっかけとなったと75%の企業等が考えている。他の企業の情報を知りたい等の要望も多く見受けられる。「登録前より依頼が多く大変である」と回答した企業等が6社あった。

その他の回答では、教育支援プラットフォームを通してくるのかと思っていたら、学校から直接依頼があったため、教育支援プラットフォームのしくみを学校側に伝えて欲しいと考えている企業等があった。

IV 考察

1 学校編

(1) 実施率について

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター及び県教育委員会の資料によると、平成25年度は、青森市内の公立中学校80%が職場体験等を実施しており、全国では98.6%、県全体では95.1%が実施している。今年度は、今回の調査で青森市内85%の公立中学校が職場体験等を実施しており、この3年間では一番実施率が高くなっている。

また、公立高等学校の場合、昨年度、全国では79.8%、県全体では78.1%が職場体験等を実施している。今年度の青森市内の実施率は約89%であった。(青森市内私立中・高等学校は100%実施。)

＜下図参照＞

○中学校の職場体験(全国及び青森県実施状況)(%)

	全国	青森県	青森市内	国立	私立
25年度	98.6	95.1	80.0	62.3	25.8
24年度	98.0	94.5	85.0	59.2	23.2
23年度	96.9	97.0	85.0	61.0	20.9

○高等学校のインターンシップ(全日制・定時制)(%)

	全国	青森県	国立	私立
25年度	80.8	78.1	10.5	40.6
24年度	79.8	70.1	15.8	40.5
23年度	77.2	70.1	10.5	41.2

(2) 教育課程上の位置づけについて

右の資料を見ると、平成25年度全国の公立中学校の82.7%が総合的な学習の時間で職場体験等を実施し、県では92.3%、青森市内では75%が同様の位置づけであった。全国、県、市内とも、この数値は年々高くなっている。

今回の調査では、青森市内の中学校のすべてが総合的な学習の時間で実施しており、位置づけの変化が見られた。ただし、学年によっては、学年行事や修学旅行での実施となっている学校もある。

公立高等学校では、平成25年度、全国で54.5%が教育課程の位置づけなしで実施しており、総合的な学習の時間での実施は20.8%となっている。

これに対し、今回の調査では、青森市内の公立高等学校の62.5%が総合的な学習の時間で実施しており、その他は、教科の時間という回答が多かった。

授業時数の確保ということで、どの学校においても職場体験等の実施に関しては、様々な工夫が見られる。行事等との兼ね合いを図りながら苦慮している様子が見える。私立高等学校は、3校中1校のみが総合的な学習の時間で実施した。(他2校は、教科の時間と休業中の実施。)

○中学校の教育課程の位置づけ(全国及び青森県状況)(%)

	25全国	25青森県	25青森市内	24全国	24青森県	24青森市内	23全国	23青森県	23青森市内
教科の授業で実施	1.2	0.0	0.0	2.0	0.0	0.0	1.1	2.5	5.9
総合的な学習の時間で実施	82.7	92.3	75.0	81.1	88.5	58.8	81.5	73.3	52.9
特別活動で実施	6.6	1.3	0.0	7.1	2.6	35.3	7.3	5.0	5.9
総合的な学習の時間で実施し、特別活動の行事として位置づけ	8.3	5.8	18.8	8.5	9.0	5.9	10.0	20.5	35.3
教育課程には位置づけなし	5.4	1.9	6.3	6.1	1.3	0.0	5.6	1.9	0.0

※青森県の場合は、複数該当する場合は、全てにカウントしていることから、100%を超えている。

※平成26年度は、19校すべてが総合的な学習の時間で実施している。

○高等学校の教育課程の位置づけ(全国実施状況)(%)

	25年度	24年度	23年度
総合的な学習の時間で実施	20.8	20.4	22.6
現場実習等教科・科目で実施	22.7	21.7	21.3
教育課程の位置づけなし	54.5	53.0	49.8

※平成26年度は、公立高等学校8校中5校が総合的な学習の時間での実施となった。

(3) 職場体験の実施日について

学校編の問2を見ると、職場体験の実施日が明らかになった。特に9月2日を見た場合、1校が40人の4クラスで考えた場合、 $40 \text{人} \times 4 \text{クラス} \times 8 \text{校} = 1280 \text{人}$ が、青森市内で職場体験となる。これに今回アンケートを行っていない東津軽郡の学校からも依頼が来るという実態を考えると、企業等はかなりの負担感があるものと予測される。このアンケートでは、実施日には大きく2つの期間があり、7月8日～10日、9月2日～4日が挙げられることから、今後、学校を含めた教育関係機関等の調整が必要であると考えられる。

(4) 学校内の組織について

学校編の問3を見ると、中学校は学年単独での組織が一番多く、高等学校においては、進路指導部、複数の分掌での組織や学科での組織が多かった。複数の分掌や専門的分掌等で組織した場合、一番の利点は引継と考えられる。その年度に行われた成果と課題が文書のみで引継ではなく、実際に関わった先生が残り、次年度実施に当たり、前年度の経験をもとに成果と課題について話し合うことは、企業等とのつながりの点からも必要と考えられる。

2 企業等編

(1) 受け入れ状況について

企業編問1(1)-1を見ると、今回調査した企業等の約50%が、職場体験等を1～3校受け入れている。また、42.9%の企業等が5校以上受け入れている。

また、問1(1)-2では、校種別で、1～3校の回答が中学校で約65%の32社あり、高等学校では約61%の30社となっている。

さらに、問1(2)からは、今年度の受け入れた延べ日数の調査では、3日と回答した企業等が10社で最も多く、全体の約20%であった。また、半数に近い約45%の22社が10日以上依頼を受け入れ、問1(3)からは、1日に受け入れた最大人数の調査で

は、5～6人と回答した企業が全体の約41%にあたる20社であった。

企業等が受け入れの際、適当と思われる人数が2～3人という回答が多かったが、実際は、それ以上の人数を受け入れているという実態が見えた。依頼の際の参考になればと考える数値である。

(2) 次年度以降の受け入れについて

企業編問2(1)を見ると、受け入れる学校数はどれくらいが適当かという質問に対しては、半数の50%にあたる26社が2～3校と回答している。しかし、約40%にあたる21社は、5校以上の受け入れも可能と回答しており、企業等の協力的な姿勢が浮き彫りとなった。

問2(2)では、企業等が受け入れる日数について、中学校で2日、高等学校では3日という回答がそれぞれ最も多かった。また、問2(3)を見ると、企業等が考える一日の受け入れで適当と思われる人数は、53.8%にあたる28社が2～3人と回答している。問1(3)では、今年度1日の受け入れ最大数が5～6人と回答している企業等が最も多いことから、実際の受け入れ人数と、適当とする人数の開きが表れている。

問1(2)の今年度の受入延べ日数を見ると、企業等の約45%が10日以上と回答している。学校の事情や考え方も理解できるが、企業等の負担感ということを考えて、受け入れ人数に関しては考慮してほしい項目の一つであるといえる。実施期間のところで触れたが、期日の重なりを解消するだけでも企業等の負担は少なくなるものと考えられる。

(3) 企業等への連絡について

企業編問5を見ると、「忙しい時間帯を避けて連絡してほしい(手短に)」について、8社が要望としてあげてきている。CSRに係る部署がある企業等であれば学校からの対応は可能となるが、多くの企業等は部署がないのが現状と推察されることから、学校側はこの点について配慮する必要があると考えられる。そのために、県教育委員会では、いかに手短

に用件を伝えるかを考えた結果、紹介連絡票<参考>を作成し、企業等の受け入れの打診に使用している。この紹介連絡票は学校名、担当者、日時や人数、内容について明記しており、電話によりまず企業等の都合の良い時間帯を聞くのと同時に連絡票を送り、企業等に検討していただき、後日、受入の有無や打合せができるようにしている。これにより、企業等は、忙しい時間帯での学校からの対応に追われず、且つ、聞きたいことや受入の有無について検討することができる。職場体験等をお願いする学校においては、この点については、十分考慮しなければならない点の一つといえる。

また、ある地区においては、企業等のつながりを尊重し、保護者も挨拶に行くところもある。

<参考>

当センターの企業等への紹介連絡票

FAX送信票	<small>※送信票は不要です。このまま、お送りください。</small>
<small>送信先：青森県総合社会教育センター 教育活動支援課</small>	
<small>FAX: 017-739-1279 TEL: 017-739-1270</small>	<small>E-mail: E-SHAKYO@pref.aomori.lg.jp</small>

青森県教育支援プラットフォーム事務局 殿

平成 年 月 日

「我が社は学校教育サポーター」紹介連絡票

以下のとおり「学校教育サポーター」の紹介を依頼したいので、連絡票を送付します。

1	学校名	
	代表者・職氏名	
2	連絡先(住所)	〒
3	依頼担当者・職氏名	
4	学年・分掌等	
5	副担当者・職氏名	<small>※依頼担当者が不在の場合に連絡が取れる方のお名前</small>
6	連絡用電話番号	
7	連絡用FAX番号	
8	E-mail・アドレス	
(1)	依頼項目	出前授業・職場見学・職場体験 <small>※該当する項目の先頭に○をつけてください。</small>
(2)	取組名称(教科等)	
(3)	依頼内容	
(4)	開催時期	
(5)	対象学年	
(6)	対象人数	
(7)	希望する職種等、登録企業の名称と番号	
(8)	備考 その他連絡事項等	

事務局処理欄	
--------	--

3 学校と企業等編

(1) 受け入れ時期に関して

企業編の間2(4)を見ると、興味深い点として、受け入れ希望時期に関する質問では、6・7・9・10月を希望していると回答した企業等が多かった。学校編の間2にある表のデータが、7月と9月に受け入れが重なっていることを示しているが、7月・9月は企業等で受け入れを希望するとしている時期とも重なっていることから、学校の実施時期と企業等の受入時期は合致していると言える。企業等から受け入れが集中して大変であるという意見をよく聞くが、予想以上に7月と9月に依頼が集中しているということ、また、その月のある一時期に依頼が集中している可能性があると考えられる。

(2) 職場体験等の課題について

ア 受け入れ先の確保について

学校編の間7において、学校が課題として考えている点は、体験日数の確保と受け入れ先の確保が上位2項目であるが、企業等が考える課題の一番多い回答は、忙しい時期に依頼が重なることを挙げている。青森市内全体で考えると、企業等の数は相当数あるが、職場体験等で学校が希望する企業はごく一部に集中する傾向にあると言える。

昨年行われた教育CSRセミナーにおいて、清川氏は「職場体験では企業選択は全くさせなくてよいと思っている。高校は『ものづくり』『サービス』といった職業選択はしてもいいが、企業選びは絶対させない方がよい。小、中学生は『パン屋さんがいい』など名前で選んでしまうことが多い。名前で選ぶ子供達には、企業は『お客様扱い体験』をさせるだけである。『パン屋さんに行きたい』と思ってきた子供は、一生懸命頑張るが、そうでない子はテンションが低く、企業は持ち上げるところから始まる。企業選択、職業選択をさせずに、生徒が新たな未知なる体験をして、今までにない新しい経験をすることによって、『何か自分で見つけ出してきなさい』と送り出してもらった方が企業側はすごく受け

やすい。」と、述べている。

また、他の地区では、地域を巻き込んだ委員会を組織し、企業等の開拓を行っているところもある。

このような取組は、学校側の職場開拓の負担軽減につながっているものと推測される。

イ 事前・事後指導について

中学校と高等学校ともに事前・事後指導を最も重視していると回答しているが、課題となった項目では、中学校で職場体験等のねらいの徹底が3番目に多く、高等学校では事前・事後指導と回答した学校が2番目に多かった。

学校編の問5を見ると、中学校の事前指導にかかる時間は6～10時間と非常に多い。また、問6においては、職場体験を実施する際に特に重視している点(3つ以内)において、中学校では、19校中18校、高等学校では、12校中11校が生徒への事前・事後指導と回答している。さらに、問9を見ると、職場体験前に生徒への事前の取組として、中学校の19校中19校、高等学校の12校中10校が礼儀やマナーの指導と回答している。しかし、企業編の問5を見ると、「職場体験等の前に、社会人としての一般常識やマナーを指導してほしい」と回答した企業等が52社中20社回答している。また、問7を見ると、企業等が生徒に学んでほしいと考えていることは、「あいさつやマナー等、社会人としての一般常識」と52社中40社の企業等が回答している。

このことから、学校では事前・事後指導を重要視しているが、企業等からは、一般常識やマナーにもう少し指導をお願いしたいという要望が出されていることから、現在学校で指導している事前指導のマナー等の指導について、その内容や方法、意欲の持たせ方等の工夫が必要と考えられる。

参考として、国においてもキャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査二次報告書(国立教育政策所生徒指導・進路指導研究センター)平成25年10月の中で、高等学校の中においても、将来の生き方や進路を考えるための指導として、高校生や卒業生が望む、将来の生き方や進路について考えるた

めに指導してほしいこととして、高校生で3位、卒業生で1位に挙げられているのは「社会人・職業人としての常識やマナー」であった。

(3) 職場体験等の安全面について

学校編問8の賠償責任保険への加入に関する質問では、「全員加入している」との回答は、中学校では19校中9校の約47%、高等学校では12校中11校約92%がという回答であった。企業等編問4によると、生徒の安全面に気を遣うと回答した企業等が21社、問5の受け入れる際の学校への要望として、52社のうち10社が対物、対人等の保険に入っ

て欲しいと要望している。

このことから、学校においても職場体験等の安全面の一つの対策として、保険加入などを進めていく必要があると思われる。

参考として、八戸市教育委員会では、中学校の職場体験「さわやか八戸グッジョブ」の実施の際、教育委員会が市内生徒全員分の保険を掛けている。

(4) その他

青森県教育支援プラットフォームに関する質問では、企業等のほとんどが、学校と企業等のつながりができてよいという回答をしたのに対し、学校では、その存在を知らない教職員が多いという回答が、約3割を占めた。

当センターにおいても、この仕組みの普及等について、今まで以上に積極的に取り組み、企業等側の好意を無駄にしないような活用方法を探る必要がある。

V おわりに

この調査を通して、将来、青森県を担う子どもたちが学校のみならず、企業等(地域)の連携とともに育成され、青森県のキャリア教育の指針に記載されている「郷土に愛着と誇りを持ち」がより身近に感じられることを願いたい。自分の地域に、こんな素

晴らしい企業や人材がいるということ、子どもたち自身が発達段階ごとに見ていくことは、より一層、「子どもたち一人一人の社会的・職業的自立に向け、郷土に愛着と誇りを持ち、チャレンジ精神あふれる人間として育つよう、必要な基盤となる資質、能力、態度を培うこと」につながり、自分自身の進路に関する学びにとどまらず、学習全般に対する意欲の向上にもつながると考えている。

結びに、年末のお忙しい中、アンケートにご協力いただいた青森市内の中学校・高等学校及び企業等の方々に深くお礼を申し上げます。

参考

○キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査『データが示すキャリア教育が促す「学習意欲」体験活動の効果(調査結果から)』(国立教育政策所生徒指導・進路指導研究センター)平成26年3月

(1) 中学校

職場体験に積極的に取り組み、事前・事後指導を重視している学校がそうでない学校よりも、

- ①日常生活において生徒の積極性が高い
- ②進学する際、将来の仕事に役立つという理由を生徒が意識している
- ③様々な事柄を踏まえて高校選択したいという生徒の意識が高い

(2) 高等学校

インターンシップの事前・事後指導を十分に行っている担任の方が、生徒は自己の生き方や進路を真剣に考え、キャリア教育や卒業後の進路に関する学習を含め、学習意欲の向上を実感している。という結果が示されている。

○キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査二次報告書(国立教育政策所生徒指導・進路指導研究センター)平成25年10月

(1) 中学校

積極性をもって取り組めた割合が8割を超える項目としては「職場の見学」(80.1%)、「職場での

体験活動」(83.6%)がある。これらの内容については、「将来の生き方や進路を考える上で役に立った」と、回答している生徒の割合が「職場の見学」では81.4%、「職場での体験活動」では84.1%となっている(役に立った、少しは役に立った合計値)。

つまり、生徒が積極的に取り組めた活動については、将来の生き方や進路を考える上でも役に立ち、成果も高い。

(2) 高等学校

将来の生き方や進路を考えるための指導として、高校生や卒業生が望む、将来の生き方や進路について考えるために指導してほしかったこととして、高校生で3位、卒業生で1位に挙げられているのは「社会人・職業人としての常識やマナー」であった。職業社会における常識やマナーを身に付ける機会を学校での日常生活のなかに用意するよりも、より適切な機会はインターンシップやボランティア活動といった体験学習の場にあると考えられる。今回の調査結果では、インターンシップの事前指導の内容として、82.4%の学校が「マナー指導(礼儀作法や挨拶の方法、電話のかけ方の指導等)」、事後指導で76.3%が「訪問先へのお礼状の作成」を挙げている。

○中央教育審議会

「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」平成23年1月31日

キャリア教育と職業教育の関係及び学校における職場体験活動と、高等学校における就業体験活動(インターンシップ)との違いを以下のように整理した。

(1) キャリア教育と職業教育

<キャリア教育>

「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」

<職業教育>

「一定または特定の職業に従事するために必要な

知識、技能、能力や態度を育てる教育」

このように、キャリア教育と職業教育の違いが明確に示され、更にキャリア教育の充実に関する基本的な考え方やキャリア教育推進の方策がこの答申で示された。

(2) 中学校における職場体験活動と、高等学校における就業体験活動(インターンシップ)との違い

<中学校における職場体験活動>

「ある職業や仕事を暫定的な窓口としながら職業や仕事を知ると同時に、働く人の実際の生活に触れて社会の現実に向き合うことが中心となる課題となる。」

<高等学校における就業体験活動>

「将来進む可能性のある仕事や職業に関連する活動をいわば試行的に体験することにより、それを手掛かりに社会・職業への移行準備を行うことが、中心となる課題となる。」

○青森県教育委員会キャリア教育の指針

平成 24 年 3 月

(1) キャリア教育の定義

「青森県の子どもたち一人一人の社会的・職業的自立に向け、郷土に愛着と誇りを持ち、チャレンジ精神あふれる人間として育つよう、必要な基盤となる資質、能力、態度を培うことを通して、キャリア発達を促す教育。」

(2) 「CSR (Corporate Social Responsibility)」

「企業の社会的責任」

(3) 「教育 CSR」

企業が社会を構成する一員として主に教育活動に参加すること。教育 CSR の活動には、学校の授業への講師派遣、工場や施設見学の受け入れ、職場体験・就業体験活動の受け入れ、作品募集型コンテストなどイベントの開催、授業用教材の開発、教員向けセミナーの実施など、様々な形態があることを示している。

参考文献

- ・平成 25 年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果(概要)
(国立教育政策所生徒指導・進路指導研究センター 平成 26 年 9 月 17 日)
- ・キャリア教育が促す「学習意欲」(キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査)
(国立教育政策所生徒指導・進路指導研究センター 平成 26 年 3 月)
- ・墨田区学校支援ネットワーク事業
(墨田区教育委員会事務局 すみだ教育研究所 学校支援ネットワーク本部事務局 平成 26 年 2 月 17 日)
- ・キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査 第二次報告書ーキャリア教育の現状と課題に焦点を当ててー
(国立教育政策所生徒指導・進路指導研究センター 平成 25 年 10 月)
- ・平成 24 年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果(概要)
(国立教育政策所生徒指導・進路指導研究センター 平成 25 年 9 月 24 日)
- ・キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査 第一次報告書ーキャリア教育の現状と課題に焦点を当ててー
(国立教育政策所生徒指導・進路指導研究センター 平成 25 年 3 月)
- ・キャリア教育を進めるための出前授業、職場体験活動ハンドブック
(青森県教育委員会 平成 25 年 3 月)
- ・平成 23 年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果(概要)
(国立教育政策所生徒指導・進路指導研究センター 平成 24 年 8 月 31 日)
- ・青森県教育委員会キャリア教育の指針(総論編)
(青森県教育委員会 平成 24 年 3 月)
- ・次世代育成にご協力いただく企業・地域の皆様へ(キャリア教育ガイドブック)～子供たちの成長

をよりよく支援するために～

(経済産業省, 一般社団法人キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会 平成 23 年度)

- ・学校が社会と協働して一日も早くすべての児童生徒に充実したキャリア教育を行うために

(キャリア教育における外部人材活用等に関する調査研究協力者会議 平成 23 年 12 月 9 日)

- ・職場体験学習に関する事業所アンケートのまとめ
(飯田市教育委員会 平成 23 年 2 月 24 日)

- ・今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)

(中央教育審議会 平成 23 年 1 月 31 日)

- ・より良き教育現場の実現に向けてー交流活動実践 10 年の思いー

(公益社団法人経済同友会 平成 22 年 6 月 22 日)

- ・中学校職場体験ガイド

(文部科学省 平成 17 年 11 月)

- ・「職場体験・インターンシップ現状把握調査」(調査概要 速報版)

(国立教育政策所生徒指導研究センター
平成 17 年 5 月 16 日)

ISSN(International Standard Serial Number)
とは、膨大な刊行量をもつ逐次刊行物の的確な把握と情報処理、流通の円滑化、利用の促進を図る必要から個々の逐次刊行物に与えられる国際的な識別コード番号のこと。

研 究 紀 要

第 26 号

平成27年 3 月 発行

編集・発行 青森県総合社会教育センター

〒030-0111 青森市荒川字藤戸 119-7

Tel 017-739-1252 Fax 017-739-1279

<http://www.alis.pref.aomori.lg.jp/>

E-mail : E-SHAKYO@pref.aomori.lg.jp

(印刷 青森コロニー印刷 TEL 017-738-2021)

この印刷物は 600 部作成し、印刷経費は 1 部当たり 241.5 円です。

